

そのに

『魔法世界』に来て数日が過ぎ、あの日以降は今日まで何事もなく平穏な日が続いていた。結局四季さんとは学校で会えず、聞きたいことも聞けず、五円玉とライターはそのまま手元に残ったままだ。あの日、何年何組か聞くのを忘れたことを、つくづく不覚に思うわけだが、まあ今日はそんなことはどうでもよかった。

今日は日曜日。空間移動装置を開発したりゼイン社に行く決めていた日である。今は朝食を食べながら、お母さんと戦隊ヒーロー物の番組を見ている。

「うん『魔法世界』でもこういう番組はやってるんだね…でもなんでこんな見てんの？」
「なんでって…お母さんの趣味よ？この後も続けてヒーロー物があるから日曜日はいいわー。
あ、その後の魔女っ子物も見逃せないわね！」

お母さんにこんな趣味があるとは全く知らなかった。それもそのはず、私は休日といえは昼まで寝てる派なので、お母さんの趣味を知ることなど出来るはずもなかったのである。

案外面白いなとヒーロー達の活躍を手に汗を握りながら見ていると、いつでもボサボサ頭のお父さんが寝起きでさらにボサボサになった頭を引っさげて、あくびをしながら台所へとやって来た。

「本当に母さんはこういうのが好きだな。部屋中フィギュアだらけだよ。今度出る魔女っ子フィギュアも予約注文したんだから」

二人の部屋がそんな魔窟になっていたとは知らなかった。お母さん殆ど末期だ。でも後で後学のためにこっそり覗いてみよう。

「あれ？そう言えばお父さん帰ってたんだ。仕事はもう終わったの？」

「ああ、やっと一段落したんで当分休みを貰ったよ。どうだ？今日久しぶりにどこかへ出かけるか？」

「ごめん！今日私行くところがあるんだ。また今度ね」

がっかりしたように溜息をつくお父さんの肩をポンと叩き、
「ごちそうさまーそして行ってきまーす」

用意して側に置いておいたケータイや財布などをズボンのポケットに入れ、玄関へ向かう。

「それにしても、『魔法世界』でもこれは同じなんだね」

それは壁に並べて掛けられている額縁。その中には私が子供の頃に描いたお父さんやお母さんの似顔絵や、クレヨンで書き殴った変な図形や、肩叩き券などが入っている。似顔絵はともかく、肩叩き券まで額に入れて飾る必要があるのだろうか…

よし、帰ったらこっそり肩叩き券を外して、『私と一日デート券』に取り替えておこう。

駅は家から徒歩十五分くらいの位置にある。いつもなら自転車で駅まで行くんだけど、どうやら『魔法世界』には自転車というものがないらしい。私の愛車もすっかり姿を消し、代わりに置いてあったのが長い杖や、箒だ。

「なるほどねえ」

歩きながら空を見上げた。平日の朝と違い、あの巨大な鳥の姿は殆どない。代わりに杖や、箒に乗った人がスイスイと空を飛んでいる。

「『魔法世界』なのに箒に乗ってる人がいないと思ったらこういうことか。平日の朝の空は、鳥専用になってるってわけね。危ないから。で、今日は日曜だから自由に飛べるわけだ。でも空を飛んで行けるなんて便利な世界だね。私は自転車がなくて不便だけど！」

人が箒で飛んでるのを見ると、腹が立つし、情けなくなるし、むなしくなる。

出かける前私は置いてあった箒にまたがって飛べるかどうか試していた。まあ案の定、箒は飛ばず、お父さんの物であろう杖でも試してみたが、無駄な努力だった。まあ飛べるなんて思っただけで、近所の子供が私の上を悠然と箒に乗って飛んでいるのを見て、人生って何て残酷なんだろうと思っただけ。

「ふん！箒に乗れなくても私には足があるんだ！駅までなら歩けばいい！」

ええ、負け惜しみですよ。負け惜しみですとも。

十五分かけて、やっと駅まで辿り着いた私は、切符を買い、ホームへと下りる。

「『魔法世界』にも電車があってよかったよ。あ：電車じゃないか。魔力で動いてるみたいだし。魔力列車ってどこかな？」

ベンチに座って、ホームを見渡した。何も変わったところはないが、ホームには誰も列車を待っている人は居なかった。それに、いつもならもう列車が来てもいい頃なのに、なかなかやって来ない。時刻表を見ると、列車は一時間に一本。日曜日は自由に箒に乗れるため、あんまり列車の需要はないようだ。前もって調べておけば良かった。

「はあ：ここは私にとっては不便極まりないね：せめて自転車くらいは欲しいな」

背もたれにもたれかかって、空を見上げながらぼやいて、ふと思いついた。

そうだ！この前会った四季さん、どうやったか知らないけどライターを作っちゃったんだから自転車くらい簡単に作れるんじゃないか？今度会ったら聞いとこう！

それからポーっと待つこと二十分。列車が来るまであとまだ二十分ほどある。こんなことならもう少しヒーローの応援をしてから、家を出ればよかったかな。待ち時間残り二十分というのはちょっと暇を持て余し過ぎる。よし、誰もいないしちょうどいい。情報番組のお姉さんが教えてくれたウエストに効くと言う体操を列車が来るまでやってみることにする。

鼻歌交じりに腰をフリフリしていると聞き覚えのある声で、

「那美：ちゃん：？何やってるの？」

急に話しかけられて、びっくりして飛び上がってしまった。声のした方に振り向くと、そこには友人の相沢友美ちゃんが残念な子を見るような顔をして立っていた。見られた！恥ずかしい！顔がにタバスコをかけられたように熱い！

「わあっ！友美ちゃん！これは違うの！ちよつと暇だったから体を動かしてただけで：決して最近ウエストが気になりだしたからやってたわけではなく：」両手をフリフリ言ってみる。

「本音が出るわよ？那美ちゃん」

友美ちゃんは笑いながら言い、私も頭をかきながら顔をトマトのように真っ赤にして笑う。

こっちの友美ちゃんも私のことを知ってくれてるみたいでちよつとホツとした。『魔法世界』に来てから友美ちゃんとは一度も会っていなかった。私と友美ちゃんの唯一の共通点である科学部なくなつて、もしかしたらこちらの世界の友美ちゃんは自分のことを知らないのではないか、という思いもあつて友美ちゃんのクラスの教室まで会いに行けなかったからだ。

私達はベンチに座り、話し始めた。

「友美ちゃんもどこに出かけるの？」

「ええ、ちよつと二駅先まで」

おお偶然だね。私もそこまで行くんだよ。友美ちゃんは買い物？

「ううん：駅の近くにあるリゼイン社という所に行くつもり」

目的地まで同じ？驚きを隠せない私を、友美ちゃんは真剣な眼差しで見つめ、

「：こんなことを言うと、何かおかしいことを言っているように思ふかもしれないけど：」

友美ちゃんは少し言葉を詰まらせた。でも、この後友美ちゃんがどんな言葉を発するのか私にはわかるような気がする。そして、意を決したように言った。

「実は私：『この世界の人間じゃないの！』」

やっぱり。予想通りの言葉だった。もう今すぐ飛び上がりたい。まさかこんな近くに同じ境遇の人間がいて、しかもそれが友美ちゃんだなんて、めちゃくちゃ嬉しい。だけど、今はまだ顔にしちやいけない。友美ちゃんは尚も真剣な顔をして、私から視線をはずして深刻そうに俯いている。ここで笑顔なんて出したら、軽薄女と思われかねない。でも私の顔は嬉しくて緩んでくる。まだだ、堪えろ。友美ちゃんの居る方とは反対側の顔をつねって何とか耐える。

「：クラスの皆にもこのことは言っていないの。絶対真面目に聞いてくれないと思ったから：でも、那美ちゃんには知っておいて貰いたかったの：ごめんなさい：変な話して：」

言い終わると友美ちゃんは黙り込んでしまった。よし、ここで笑顔を開放だ。友美ちゃんの肩に手を置いて、私の中の最高の笑顔で、「ううん！全然変じゃないよ！私もこの世界の人間

じゃないんだから！」

友美ちゃんは、「え？」というような表情を浮かべて、こちらを見た。恐らく私も同じ境遇だなんて全く思ってもいなかっただろうし、まあそういう反応になるだろう。

「だからね、友美ちゃん。私も友美ちゃんと同じでこの世界に飛ばされて来ちゃったの！」

友美ちゃんは驚いた顔で私の体をペタペタ触り、

「えっ！じゃあ：今ここに居る那美ちゃんは：この那美ちゃんは：私の知ってる：あの那美ちゃんなの？」

嬉しそうな、でも泣きそうな、抱きしめたくなるような顔をしてこちらを見つめる。

「そうだよ！科学部の隅っこで座敷童してた美南那美だよ！」

そういうと友美ちゃんは大声で泣きながら抱きついてきた。積極的！なんて一瞬思ったがそうではなく、友美ちゃんもこっちの世界に飛ばされてずっと不安だったんだろう。私は泣いている友美ちゃんの頭を撫でてあげた。

一頻り泣くと落ち着いたのか、私の胸から離れ、座りなおして涙を拭きながら話し始めた。

「私、ずっと不安で怖かったの：周りの皆は私の知ってる人達ばかり：でも知ってる人だけ知らない人達：うまく言えないけど：そんな感じなの：」

わかるような気がする。自分の知ってるクラスメイト。だけどその人達は全員魔法なんていう変態技を当たり前のように使う人達で、私だって不安だったよ。だけどここで友美ちゃんのように泣かないのは、精神的に強いからだろうか？

「最初はわけがわからなかった：皆、魔法なんて使うから：世界がおかしくなったと思った：でも：段々：おかしくなったのは私の方じゃないかって思い始めて：」

『魔法世界の友美ちゃん』は、魔法の成績も優秀で、学年トップクラスだったようだ。でもここにいる（元の世界の友美ちゃん）は当然魔法なんて使えない。成績優秀だった『友美ちゃん』が突然魔法を使えなくなったことで、担任や魔術教師や両親が心配して、この（友美ちゃん）は病院にまで連れて行かれたらしい。物凄く辛かったに違いない。私だったらその時点で泣いちゃうね。

「そこで『突発性魔力失調症』と言われて：やっぱり私がおかしいんだって：」

また泣きそうになる彼女の頭を撫でながら、

「大丈夫、友美ちゃんはおかしくないよ。おかしいのはこの世界の方。だからもう悩まなくていいんだよ。それにしても『突発性魔力失調症』か：ふふ：次の魔術の授業をズル休みする理由ができたわ：」あ、でもダメだ。私元から使えない設定だった：

「ふふ：那美ちゃんらしいわね」友美ちゃんは鼻を吸り、「だけどズル休みはいけないわ。私だって魔法は使えないけど、使えるようになろうと頑張ってるんだから」

「そうだね。ここで魔法が使えるようになって、（元の世界）に戻ろう！そしたら私達、（元の世界）では最強だよ！皆を驚かせよう！」

その後、『魔法世界』にきた最初の日のことを話した。結界に閉じ込められて襲われたことや、どうして『魔法世界』に飛ばされてしまったのかその理由を。

それを聞いて友美ちゃんは驚いたり、納得したように頷いたりしていた。

「それで今日、〈元の世界〉に戻るためのヒントを掴むためにリゼイン社に行こうと思ったわけ」

「私も同じ。それに、おかしくなつたのは世界か私かということも知りたかつたから：でもそれは今日那美ちゃんに会つたことで解決できたけどね。今日ここで那美ちゃんに会えてよかった。那美ちゃんの教室に行こうとも思つたんだけど：もし私のことを知らなかつたらどうしようと思つたら、怖くて行けなかつたの」

「私もだよ。けどもう大丈夫！私達はこうして会えたんだもん。これから二人で〈元の世界〉に戻るように頑張ろう！」

私達はお互いの手を力強く握りあつた。

そこへ列車がやつてきた。私達は決意を胸に列車に乗り込む。

向かうは二駅先にあるリゼイン社。

目的の駅は市内でも一番賑わう場所だ。駅前には噴水があり、この辺りで待ち合わせと言えばここが定番だ。そして駅近くには大型のショッピングモールがあり、日曜日ということもあつてか大勢の人が箒や杖で買い物に訪れている。いいね乗れる人は。

私達は帰りに買い物に寄ることをお互いに確認し、まずは第一目標であるリゼイン社へ向かう。場所は列車の中から確認済みだ。

ショッピングモールのすぐ近く、元々デパートだった地上八階、地下一階の建物。どこかで聞いた名前だと思つたのは〈元の世界〉に居る時に、ショッピングモールに来た時に見ていたからだろう。

「さて：どうやって中に入るかな：元デパートだけあつて入り口は沢山あるけど：日曜だしどの入り口も開いてないよね：」

「大丈夫よ。会社の人に約束は取り付けてあるから。すぐ来てくれるって」

友美ちゃんは携帯を切りながらあつさりと言つてのけた。

「ええ？なに？友美ちゃんってこの会社の人と知り合いなの？」

「違うわよ。父に頼んだの。この人とお話がしたいって。私の父国會議員だからその方が話が早いと思つてね」

なんと：まさか友美ちゃんがそんな地位チート娘だったとは全く知らなかつた：私のお父さんにも是非頑張つて頂きたいものだ。：でもあのボサボサじゃ無理か。

「：ていうかそれって職権濫用じゃ：？」

「私も普段ならこんなことはしないわよ。でも今回は緊急事態だし…ね？」

片目を閉じて笑顔でそう言う友美ちゃんは、さっき駅で泣いてた人とホントに同一人物なのかと疑いたくなるほどのしたたかさだ。はたしてどっちが本当の友美ちゃんなんだろうか。

会社の人が出てくるまで二人でワイワイしていると、

「賑やかでいいわね。ええと…どちらが相沢友美さんかしら？」

そう言って出てきたのはこの辺りでは絶対に見かけないような金髪美人のお姉さん。外国の人を雇うなんてこのリゼイン社って言うのは結構グローバルな会社なんだね。とりあえず、持ち前の英語力で失礼のないように挨拶をしておこう。

「え…えつと…はろーぼんじゅる！ぐっばい！」

我ながらアホな外国語を披露し、今日の仕事はこれにて終わり。クルリと反転して駅へ戻ろうとする。…が、襟首を掴まれ友美ちゃんは引き戻されてしまった。

「もう、落ち着いて那美ちゃん。確かに外国の人だけど日本語で話していたでしょ？」

「ああ！そう言えば！」

私達の様子を見てお姉さんは笑い、

「こちらをしっかりしたお嬢さんが相沢友美さんね。でも今日は一人で来ると聞いていたのだけれど？」

「はい…でも彼女も私と同じで、空間移動のことについて詳しく聞きたいそうなんです。彼女も一緒に駄目でしょうか…？」

「いいえ、結構よ。向学心を持った学生は大歓迎。さあどうぞ」

お姉さんは私達を中に入るように促す。

中はデパートの面影をそのまま残していた。所々にオフィス用の机などは置いてあるが、こちらの方が場違いに見えるほどデパートだった。ただ、ショーケースの中に入れられているのはこの会社が開発した小型魔力装置や大型魔力装置の模型などだ。

昔まだデパートだった時によく親と一緒にここへ買い物に来た記憶がある。友美ちゃんも懐かしそうに、どこがどう変わっているのか確かめるように見回している。

「この辺に化粧品売り場があったんだよね。それで向こうに靴売り場があって…うわっ！マネキンもそのまま置いてあるよ！しかも服の代わりにメモがいっぱい張られている…」

「社員さん達の連絡用みたいね…何というか…独特なセンスの会社ですね」

友美ちゃんが苦笑交じりにお姉さんに言う。

「あるものは使わないと勿体無いでしょう？それに社員も結構面白がってやっているのよ？」入り口の鍵を閉め、こちらへお姉さんがやってきた。

「自己紹介が遅れたわね。私はリゼイン・ポートマン。この会社の社長よ」

驚いた！てつきり受付に雇われただけの美人なお姉さんと思っていました。友美ちゃんも彼女が社長だということを知らなかったようで目を丸くして驚いている。

「あら？私が社長じゃおかしいかしら？」

私達の反応に不満そうなりゼインさん。彼女はそういう反応をされるのが嫌いなようだ。

でも、もう一度こちら見て今度はリゼインさんが驚いた。なぜなら私達は目を輝かせ、リゼインさんに羨望のまなざしを送っていたからだ。こういう反応はされたことがないのかりゼインさんはたじろいでいる。

「すごい！カッコいいです！ぜひサインを！」

私達は息びったり、全く同じことを同時に言い、机の上においてあったペンとメモ用紙を持ってリゼインさんに迫る。彼女は顔を真っ赤にして、手を前でブンブンと振りながら、

「いやややや：わわ私はゆーめいじんでもないし：さささサインとかはー」後ろへ一歩、二歩下がったところで、「そそそ：それよりも！空間移動の話をしましょう」

顔を真っ赤にしてリゼインさんは私達のペンとメモ用紙を取り上げ自分の横のショーケースの上に置くと、私達を通り越して先の方へ進んでいく。当然私達は猛然と抗議したけど、それをリゼインさんは完全無視。一つ咳払いをし、手招きして私達呼び、ショーケースの中にある模型を指差す。

「これが空間移動装置の模型よ。本物の二十分の一の大きさね」

それはこの前ケータイで調べたのと同じ物だ。でもグラフィックで見るとはちよつと違う。模型といえどこうしてみるとかなり重厚感があり、立派に見える。飾り気は相変わらず皆無だけど。

「もう少しスタイリッシュにしたかったんだけどね。どうも研究者っていうのは頭が固くていけないわね。余分な物が無いことが美しいんだって聞かないんだから。こんな飾りっ気もなくて無骨なものより、可愛くて綺麗な方が使う時も気持ちがいいと思わない？」

「そうですね！形は変えられなくても色くらいは可愛いくして欲しいですね！」

社長もそう思っていましたか！実は私もそう思っていました。私はリゼインさんの意見に激しく同意し、がっしりと握手を交わし、見つめ合ってコクリと頷くと、リゼインさんはケースから模型を取り出し、私は社員さんの机をあさって十二色入りの油性マーカーをみつけて、模型に色を塗り始めた。

「ここは：やっぱり赤ね。それでこっちが青で：」

「えーここは水色でー：あ！リゼインさん！そこは絶対ピンクですよ！」

私達はどんだん色を塗っていく。そして数分後、ついにそれは完成した。

「出来た！完璧に完成よ！これこそ私の追い求めていた物よ！名付けて！」

「リゼ・那美一号！」

色を塗った模型を友美ちゃんに紹介するように見せ、二人声を揃えて言い放つ。

「えっと：社長の名前を入れるのはともかく、開発に係わっていないただ模型に色を塗っただけの那美ちゃんの名前を入れるのは、開発した人が泣くのでは？」

ご意見ごもつともだけど、しかし世の中そういうもんだよ友美ちゃん。彗星や新種の動植物の学名だって発見者の名前が付けられる。それと同じことなんだよ。

「今日はいい仕事をさせてもらいました。それではリゼインさん、私はこれで」

一仕事終えて、颯爽と帰ろうとする私の襟首を捕まえて引き戻す友美ちゃん。「グッジョブ！」
と言い、手を振って見送ろうとしていたリゼインさんにも、

「グッジョブ！じゃないですか！」

とツツコミを入れ、本来の目的を思い出す。

「ああ：そうだったわね。今日は装置のデザインの話をしに来たわけじゃなかったのよね」

リゼインさんは深呼吸をし、真面目な表情をして話し始めた。

「空間移動を誰でも出来るようになるのが人類の夢。それを実現しようと開発されたのがこの空間移動装置。公式名は『リゼ・那美一号』」

「それ、公式名にしちゃうんですか？い：いえ：まあいいです」

友美ちゃんはそれはいかがかと言いたかったみたいだけど、これ以上話が脱線するのを嫌ったのか諦めたように溜息をつき、そのまま続けるように促す。

「空間移動する時に最も大切なのが、空間の歪みをコントロールすることよ。大きくなりすぎると周りの物をすべて巻き込んでとんでもないことになってしまうから。空間移動魔法を使える人は先天的にそのコントロールが出来る人達。努力ではどうにも出来ない。だから世界で数えるほどしか空間移動魔法を使える人が居ないのよ」リゼインさんはその場を歩きながら説明を続ける。

「その人達はどうかやってコントロールしているのか、実際に会って聞いてみたわ。すると脳内で歪みの大きさを高速計算していると言う答えが返ってきたの。移動魔法独特の複雑な計算式が存在して、その人達はそれを一瞬で正確に計算することができるらしいわ」

難しい話になってきて私の頭からは湯気が出そうになる。でも友美ちゃんはきちんと理解しているようでリゼインさんに質問をする。

「では、その計算式を教えてもらえば誰でも空間移動出来るようになるのでは？」

「そうね。でもそれは不可能。才覚の無い人間には答えを出すことが出来ないの。だから装置を開発する必要があったのよ。でもそうね：あくまでも私の考えだけど、もしその計算を解ける普通の人間が居たとしても多分答えを出すまでに、八千年はかかるかしらね」

絶句した。それってどんな計算式？ノート一冊じゃ到底収まりきらないだろうね。それに八千年もかかっては、仙人でもない限り空間移動する前に天国へ強制連行されてるに違いない。

「その計算をするのがネックになって、今まで空間移動装置は開発されなかったわけね。でも我々リゼイン社はそれを克服する技術を持っていたのよ」

「技術…？」

友美ちゃんは首を傾げてリゼインさんに聞く。

「そう、リゼイン社が構築した『マグネット』よ」

今度は私が首を傾げて、

「マグネット…？マグネットって磁石のこと？」

「違うわよ那美ちゃん。磁石のことじゃなくて『マジカル・グローバル・ネットワーク』のこと。この世界のインターネット接続サービスよ」

ああ、そういえばこの前説明を読んだっけ。忘れてた。

「元々は念話の暗号化のために構築されたのだけれど、それが役に立ったわ。『マグネット』の処理能力は人間の脳の数万倍はあるのよ。システムを合理化させればもっと上がるかも知れないわね。とにかく、その『マグネット』の処理能力をもってすれば、そのくらいの計算は簡単にこなせるわけよ」

そこまで言ってリゼインさんは溜息をついた。

「ただ一番大変だったのは、その複雑な計算式を『マグネット』に打ち込む作業よね…それはもう…大変だったわ…ふふ…ふふふ…」

常人なら八千年はかかる計算式を打ち込むのだから、相当過酷な作業だったのだろう。リゼインさんはそれはもう怖い顔で不気味に笑っている。だからなのか、友美ちゃんはそれに触れないよう別のことを質問する。

「え…えっと…空間移動をするともなれば、魔力機関も相当特殊な物なんですよね？」

質問に我に返るリゼインさん。

「そ…そうね。そっちの開発も苦労したわ。何せ頭の固い連中ばかりだし。もうちよつと柔軟に発想すればもっと小型化できたのに…あの連中ときたら…本当にあの連中ときたら…」

ブツブツと文句を言いながら、ショーケースを指でコツコツと叩く。どうやら研究者に対して相当不満が溜まっているようだ。地雷が多過ぎて何も聞くことが出来なくなる。

「あら…ごめんなさい…こんなことあなた達には関係のないことだったわね…思い出したらイライラしちゃって…」リゼインさんは色を塗った模型をケースにしまい、「場所を移しましょう。立ち話も疲れるでしょう？八階に社員食堂を兼ねたレストラン街があるからそこでゆっくり話しましょう。あつちにエレベーターがあるからそれで」

社長自ら案内してくれるらしい。でも何度もここへ来たことがあるので案内されなくてもエレベーターの場所はわかってるんだけど、ここは一応案内されておこう。

「でも懐かしいね。中も殆ど変わってないし」

「ええ。あ、エスカレーターもそのままよ。それからあそこにはカフェがあったのよね？今は

休憩所になつてゐるみたいだけど」

私達はリゼインさんに聞こえないよう小声で、記憶の中のデパートと現在のリゼイン社を照らし合ひをしている。…と、その元カフェの休憩室で何か動くのを見た。友美ちゃんもリゼインさんも気付いていない。目を凝らしてよく見てみるとその動く物体は、私より頭一つ分背が低く、長い黒髪が背中の中辺りまで伸びた女の子のようだった。私そんな子と何日か前に出会った気がするけど…まさかね。

「那美ちゃんどうしたの？リゼインさん行っちゃうわよ？」

「あ、うん。すぐ行く」

返事をし、再び休憩所の方に目をやるともうその姿は消えていた。

八階のレストラン街は店の入れ替わりはあるものの、デパートだった時と何も変わっていない。リゼインさんによるとここだけは一般の人の利用も可能で、その売り上げはリゼイン社の利益になるらしい。魔力装置の開発に、ネットワークサービスに、飲食業。ホントに尊敬しちゃうね。リゼインさんの商才に感心しつつ、私達は社員さんに最も人気のあるというレストランへと入った。私と友美ちゃんは隣同士で、リゼインさん私達の対面の席に着く。

「何でも好きな物を注文してちょうだい。もちろんお金は私が払うから安心して」

そう言うことなら、お言葉に甘えさせて頂きましょう。メニューにざっと目を通してみると食べ物から飲み物までどれにしようか迷うほど豊富に揃っている。だが値段を見て驚いた。紅茶一杯千円？

「高っ！ほ…ホントにいいんですか？」さすがに遠慮したくなる。

「いいのよ。社員割引で半額になるからね。高いのに社員に人気がある理由わかるでしょ？」

「なるほど…それじゃあ…遠慮なく」

私は一杯千円の紅茶を遠慮も躊躇もなく注文。友美ちゃんはやっぱり遠慮したのか三百円のオレンジジュース。リゼインさんは八百円のコーヒーを注文した。

「いや…那美ちゃん…やっぱりここは遠慮するものでしょ？お金を払ってくれる人より高い物を注文するなんて失礼よ…」

「いいのよ。それよりも話の続きをしましょうか。何か質問はある？」

「じゃあ、私から。『リゼ・那美一号』を使って時空の移動って出来ますか？」

いきなり核心（だと思う）を突く質問を試してみた。だが、こちらの事情を知らないリゼインさんにはその質問の意味がわからない様子だ。

「時空の移動というのはどうのことかしら？わかりやすく説明してもらえない？」

「えっとですね…今のこの世界は『魔法世界』ですよ。この世界とは別の『科学世界』があったとしてそちらの世界へ行くことが出来るかどうかと言うことなんですけど」

『科学世界があったとして』と言ったのは、『魔法世界』においては、『科学世界』は夢物語であるためである。また、その逆も然りだ。マンガからの知識だけだ。

「あなたは『科学』というものを信じているの？」

「あ：いえ：あったらいいなーとか、おもしろいなーとか思ってるだけで」

そういうことにしておく。でなければこの世界では変人扱いされてしまうかもしれないからだ。私達にとってみれば、この世界の人全員が変人なんだけどね。

「面白い発想ね。だけどそれは無理ね。『リゼ・那美一号』は空間を歪めることは出来ても時空を歪める程の出力はないわ」

「じゃあ、時空ホールという言葉は聞いたことがあります？」

「時空ホール：？さあ、聞いたことがないわね。それはどういうものなの？あなたが考えた新しい理論？それとも誰かから聞いたのかしら？」

リゼインさんは身を乗り出して興味津々の様子で聞いてくる。

「えっと：一応人から聞いたんですけど：時空ホールって言うのは空間の歪みから出来るそうなんです。そこを通れば、別の世界へ行けるとか何とか言ってたんで：」

「面白いわ！その人はどんな人？」リゼインさんは目を輝かせ、ますます私に迫って、「いくつくらいの人？おじさん？おばさん？それとももつと若いのかしら？どこに住んでるか聞いてない？ぜひその人に会いたいわ！」手を取り、お願いするように言ってくるが、ごめんさない、ちょっと言えませんか。なぜか四季彩花さんの名前を出すことに躊躇いがあった。彼女が秘密にしたがっていた事を私がポロツと言っちゃうかも知れないからだ。もしかしたら時空ホールという言葉もあんまり人に話さない方が良かったのかもしれないと、少し後悔した。

「私もその人の住んでる所は知らないんです。だから会うのはちょっと無理かと：」

なんとか話を逸らそうとするが、リゼインさんは食い下がってくる。このまま迫られたら言わずにいられなくなる。どうしようかと思案しているその時、私を救う軽快な音楽がリゼインさんのポケットの中から聞こえてきた。ケータイの着信音だ。

「何よいいところなの！ちょっとごめんさないね」

リゼインさんは席を立ち、私達に聞こえないように電話の相手と話している。それにしてもリゼインさんも若いね。いや、元々若いけど（多分二十四歳くらい）、着信音が日本の人気アイドルグループの曲だったからちょっと意外だった。こういう所も好感が持てる。そうしている間に注文した飲み物が届き、それを飲みながらリゼインさんを見てみると、

「なんですって？」

いきなり大声を出した。びっくりして私と友美ちゃんは少し飲み物をこぼしてしまった。千円なのに：もったいない：ちょっと落ち込みながら紙ナプキンでテーブルを拭いていると、リ

ゼインさんが近づいてきて、

「ごめんなさい。ちょっとトラブルがあったみたいで下に行かなくちゃいけなくなっただの。話の続きはまた次の機会に。あ、そうそう、お腹がすいたら好きな物を注文して食べてちょうだい。支払いはリゼインでって言ってもらえばいいから」

そう言うとりゼインさんは、熱いコーヒーを一気に飲み干し、店を出て行った。

「何があったのかな：？」

「さあ：私達には言えないことなんでしょう。それより、結局〈元の世界〉に戻る方法はわからなかったわね：空間移動装置でも無理みたいだし：」

「うん：出力がどうか言ってたから、それを何とかすれば、何とかなるのかも知れないけど：どっちにしても、私達じゃどうしようもないね：」

二人で重く息を吐く。どうも行き詰まってしまった感があるね。私は紅茶を啜りながら、「ここに四季さんでも居れば、何かわかるかも知れないんだけど：」ポツリと言うと、

「呼んだ？」

いきなり後ろから声をかけられて、またもやビクツとして飲み物をこぼしてしまった。滅多に飲めない高級紅茶なのにどうしてくれるのよ！涙目になりながら文句を言おうと後ろを振り向くと、そこにはどこから湧いて出たのか、四季彩花さんが私の紅茶物を欲しそうな目でジュツと見つめて立ち尽くしていた。

「だっ：ダメよ！これは私のなんだから！飲みたければ自分で注文して飲みなさいよ」

「わかった」

そう言っただけで四季さんは席を飛び越え、私の左隣に座ると店員さん呼び、私の飲んでいるのと同じ紅茶を注文した。

「支払いはリゼインで」

待て待て、何でそうなる？

「あなたの分までリゼインさんが払うなんておかしいでしょ？」

「大丈夫。あなたが二杯飲んだことにすればいい。問題ない」

四季さんは私の肩に手を置き、キラキラした無表情で言い放った。呆れて声も出せないでいると、今度は右隣の友美ちゃんが私の肩を叩き、

「あの：那美ちゃんは四季さんと知り合いだったの？」

「え：うん、まあね：あれ？友美ちゃんも四季さんのことを知ってるの？」

友美ちゃんも四季さんと知り合いだったとは驚きだ。もしかして私と同じ境遇の友美ちゃんにも私と同じ話をしたのだろうか？それにしても駄で話した時、何も知らない風だったけど：

「アイザワトモミが私のことを知っているのは当然。私達は同じクラス」

ああ、なるほど。それなら知ってて当然だね。

「つて、ええ！そうだったの？」

また驚いた。それじゃあ、怖がらずに友美ちゃんのクラスに行ってれば、四季さんに会えてあのライターと五田玉は返せてたのか。やっぱり何年何組か聞いておくべきだった。

ん？でもそれじゃあ…

「友美ちゃんが向こうの世界から来たってことも知ってたの？」

四季さんに顔を近付けこっそり聞いてみると、紅茶を飲みながらコクリと頷いた。だったら初めて会ったあの日に言っておいてくれれば良かったのに。

「だけど、アイザワトモミには、あなたに話したことを話していない」

なるほど、要するにリンクがどうかという話は友美ちゃんにも秘密にしておいてほしいということか。

「ところで…」私は、なおも小声で、「あなたさつき、一階の休憩室に居なかった？」

その言葉を聞いて、四季さんの紅茶を飲む手がピタリと止まる。止まったまま動かない。震えることもなく飲む格好のまま、まさしく静止している。

そして静かにカップをテーブルの上に置き、表情を変えずに言い放った言葉が、

「ソナトコロニワ、イッタコトガナイ」

「やっぱりあんたか！」

四季さんの頭を拳でグリグリしてやる。一方の四季さんは、グリグリされながらなぜバレたのかわかっていない様子で、頭の上に「？」が何個も飛んでいるようだった。あの言い方でバれない訳ないでしょ。今といいあの時の素人催眠術といい…まったく、面白い人だね。

「それで？あんな所で一体何をしたの？…というか、どうやって入ったの？」

「先日、ナミから聞いた情報を確認するためにやってきた。日曜なら社員も少なく侵入しやすいため今日を選んだ。侵入口は二階入り口。セキュリティが甘い。私が善良な市民でなければこの会社の機密は外部に漏れていた」

「無許可で忍び込んでる時点で善良な市民とは言えないと思うけど？」

「そんなのどうでもいいというように、四季さんはツツコミを無視してまた紅茶を啜り始めが、
「あ」

と、唐突に何かを思い出したかのように顔を上げ、カップを持ったままこちらへ振り向いた。なんでそんな少し申し訳なさそうな顔してるの。

「今、ミナミナミのことをナミと呼んでしまった。ファーストネームで呼んでしまった以上、

私とあなたは一心同体」

「いやいや！意味わかんないし！」

「…もとい、ファーストネームで呼んでしまった以上、私とあなたは友人。私のことも彩花と呼んでくれていい。むしろそう呼んで欲しい。よろしく」

そういうと四季さんは、カップを持っていない右手を差し出し、握手を求めてきた。なんか凄く強引な理由だけど、まあいいか。溜息を一つつき、握手に応じた。

「よろしく、彩花」

そう言うのと四季さん改め彩花は、嬉しそうなオーラを出し、なぜか頬を赤く染めた。するとまたなぜか、右隣に居る友美ちゃんまで頬に両手を当て顔を真っ赤にしている。

「ななな…那美ちゃん…握手をしたということは…しし…四季さんと一心同体になるということ？一心同体になるということは…はわわわだだだダメよ！えっちなのはいけないわ！」

「友美ちゃん…違うから…」

私は涙目になりながら全力で否定した。

私達は三人でしばらく話をし、そしてレストランを出ることにした。

彩花が遠慮なしにリゼインさん払いで高級紅茶の注文を繰り返したため、これ以上ここに居るわけにはいかないという、私と友美ちゃんの意見が一致したからだ。

彩花はもの凄く残念そうなオーラを出していたが、二人でこれからショッピングモールへ行くことを聞くと、キラキラの表情になり、

「私も行く」

やっぱりか！

「えー…？どうする？友美ちゃん」

「私は別にいいけど。那美ちゃんは嫌なの？四季さんとはたった今友達になったんじゃないかっただ？」

「まあそうなんだけど…なんか向こうでも『支払いはリゼインで』とか言いそうだし…」

「そんなことは言わない」彩花は無然とした表情をし、「支払いはナミに任せる」

「なるほど！それなら安心だね！…ってなんでやねん！」

見事な(?)ノリツツコミを披露し、また彩花の頭をグリグリしてやった。そんな様子を見て友美ちゃんもクスクスと笑っている。笑ってる場合じゃないよ友美ちゃん。この子ホントに『支払いはナミで』とか言い出しかねないんだから。私は人に物を買ってあげられるほど貯金箱に余裕はありません。

私達がワイワイと話しながら、レストランの出入り口の所まで来ると、いきなり八階フロアが薄暗くなった。何事かと見上げてみると、照明が消えていて、それはフロア全体に及んでいた。どうやら全ての動力が落ちてしまっているようだった。

「うわ…一体何事…？エレベーターも止まっちゃってるよ？」

「さっきリゼインさんが慌てて下りて行ったのと何か関係があるのかしら…？」

「…リゼインがいなくなった後すぐにレストランを出るべきだった。もう手遅れ」

彩花は私の方をジトツとした目で見つめ、不満を漏らす。だが、ここで問題なのは、リゼインさんがいなくなった後、紅茶を何杯もお替りをして、一番時間を使っていたのは誰かということだ。言うまでも無くそれは彩花である。

「誰のせいで時間を喰ったと思ってるのかなー？」

今度は私がジトツとした目で彩花を睨みつけ、そして本日三度目のグリグリを…しようとした時、フロアの奥のほうから足音が聞こえてきた。

足音は一つや二つではなく、もつと大勢が歩いてくる音だ。

程なくして足音の主達の姿が見えた。数は男女織り交ぜて二十人程。歳は私達と同じくらい。全員が普段着のような格好で、リーダーらしき少女を先頭に、こちらへ近づいてくる。

その少女は、肩口まで伸びたボサボサの茶髪を左手で鬱陶しそうに搔き上げながら、右の掌を上に向け火の玉を作り出した。

「そこのお前ら。抵抗するなよ。変な真似したら丸焼きにするぞ」

少女はそう言うのと鋭い眼光をこちらへ飛ばし、それを受けて私と友美ちゃんはたじろいだ。

もとより私達は魔法を使えず、多分この少女一人相手でも勝てはしない。しかもその少女の後ろにはまだ十数人の魔法使いが並んでるんだから、味方に魔法世界の住人が一人しかいないこの状況では、勝機など微塵もあるはずもない。

だから私達は少女の言うとおりに大人しくしていたのだが、あろうことかその味方唯一の魔法世界の住人彩花は多勢に無勢はなんのその、やる気満々のオーラを体中から噴出させているのだから大変だ。そんなもの出すな！「なに戦う気での！あんな人数に彩花一人で勝てるわけないじゃない！落ち着け！とにかく落ち着けー！」必死で止める。

「あいつらは恐らく私達に害をなす者達。ここは実力で排除するべきでは？」

「相手が一人だけならまだしも、あんな大人数なのよ！怪我だけじゃ済まないよ！」

彩花は少し考えて、

「…ナミ…もしかして私のことを心配してくれてる？」

「もしかしなくても心配してるっての！」

「わかった…言う通りにする」

彩花は頬を赤く染め、コクリと頷き私の言葉にしたがった。だから何でいちいち赤くなる？それは仕様なのか？それともあんたは恋する乙女か。

「その三人。中に入れ」

少女は顎でレストランを指し示し、しかたがない、私達は素直にそれに従った。

レストランに舞い戻った私達は、彩花、私、友美ちゃんと、さつきと同じ並びで席に座らされ、その周りを数人に囲まれた。残りのメンバーは出入り口の見張りや、奥にいるレストラン

の従業員の拘束に向かって行く。リーダーの少女はというと、さつきリゼインさんと色を塗った『リゼ・那美一号』の模型を手に、私達の向かいの席にどっかりと腰を下ろしている。

「そんなにビクビクすんなよ。大人しくしてりや何もしねえよ。…ん？」

少女は猫が獲物を狙うような目つきで友美ちゃんを見つめた。友美ちゃんは「ひっ！」と小さく悲鳴をあげ、私の腕に縋りつく。友美ちゃんの胸が私の腕に触れた。半分ください。

「あんた、どこの高校だ？」

意外な質問だった。何か因縁をつけるのかと思っていたけど。胸がデカすぎるとか。

「へっ…あ…あの…」

友美ちゃんは高校の名前を素直に答えた。

「ふん…なるほどね…」友美ちゃんの次は私と彩花を見て、「あんたらは、どこ中だい？」

「なっ…！失礼な！私が中学生に見える？」

「そう、とっても失礼！」

私と彩花は少女の言葉に憤慨した。そりや確かに数ヶ月前までは中学生だったけど今は歴とした高校生であり、身長だっちょよつとは伸びた。私は敢然と不服を申し立てる。

「私はこの友美ちゃんと同じ高校一年！彩花はともかく、私が中学生に見えるなんて、あなたどこで判断してるの！」

「胸」

少女は事も無げに言い放った。私達三人は反射的に自分の胸を押さえる。

「む…胸…ですか？」と、友美ちゃんは恥ずかしそうに言う。

「わっ…私だっちょマトくらいはあるもん！」と、私は抗議する。

「私もまな板ではない。メロンパンくらいの膨らみはある」まあ、あるかな？

「ああ、わかったわかった。悪かったよ」

少女は微塵も悪かったとは思っていない面倒くさそうな言い方で謝った。失礼な！私はこれから大きくなるんだもん。毎日牛乳を飲んで努力してるんだから！（効果不明）そして友美ちゃんや梢ちゃんの胸を吸収して大きくなるんだから！（実現不可）

「ところでナミ、『彩花はともかく』というのは失礼。私のどこが中学生というのか簡潔に答えてもらいたい」

「背」

これ以上なく簡潔に答えてあげた。そしてそれが的確な答えでしょ。彩花は胸よりも背の方を気にしているらしく、どんよりオーラを出して落ち込み黙り込んでしまった。

「ま…まあ、背はこれから伸びますよ！だからそんなに気を落とさないで…」

友美ちゃんがフォローするも、その言葉は彩花の耳には届いていないようだ。

と、突然ドンという音がテーブルから響いた。びっくりしてそちらに振り向くと、テーブルの上に例の『リゼ・那美一号』の模型が置かれていた。

「んな話はどうでもいいんだよ！」

あなたが最初に胸だの何だの言い出してきたんでしようが。

「それよりもお前ら、この『空間移動装置』がどこにあるか知ってるか？」

私と友美ちゃんは顔を見合わせた。この少女の目的は『リゼ・那美一号』なのか？ならばリゼインさんが言っていたトラブルというのは自明だ。

『この少女達の襲撃』

リーダーであろうこの少女がこんな所でんびりとしている所を見ると、下はもう制圧されている可能性が高い。そして、リゼインさんや研究者を見張っている、別の仲間が他にもいると言うこともある。

「どうなんだ？知ってるのか？」

私達は首を横に振る。もちろん知っていたとしても言わないけど。でもここで疑問が浮かんだ。この会社全てを制圧しているはずなのに、装置を見つけられないのはどういうことなんだろう。もしかして装置はこことは別の場所にあるのかな？

「くそっ：こんな派手な色してんのに、見つからないってのはどういうことだ？」

少女のその言葉を聞いて、私達は思わず吹き出しそうになった。その模型の色はついさっき私とリゼインさんが塗ったものだ。だけど少女達はもちろんそのことを知らない。

少女の携帯に、装置を探索しているメンバーからの連絡が入る。漏れ聞こえる声から察するに、やっぱりこの独特な色を頼りに探しているらしい。色を塗ったことでこんな効果があるとは。

私と友美ちゃんは俯き、お互いの太腿をつねりあって、必死に笑いを堪えている。

「ん？何だお前ら？何を笑ってるんだ？」

気付かれた？だが私は咄嗟に、

「違うの：こんな時だって言うのに友美ちゃんがくすぐってくるんだもん」

と、口から出任せをいうと、友美ちゃんも、

「そう言う那美ちゃんだって私をくすぐってきたじゃない！」

と、私の言葉に乗っかってきた。

「アホか、お前ら」

少女は心底呆れたように言い、私達から視線を外して模型を見ながらテーブルを指でコンコン鳴らし始めた。連携プレーでうまく誤魔化したようだ。ふふん、ちよろいもんだね。

「もしかしたらこの色…カムフラージュかも知れねえな…」

ポツリと言った少女のその言葉に、ピクツと反応してしまった私と友美ちゃん。それを見逃さなかった少女はさすがと言うべきか。

「何だ？カムフラージュって言葉に反応したよな？やっぱりお前ら何か知ってたんだな？」

少女は両手でバンッとテーブルを叩き、身を乗り出して迫る。

「正直に言いな！何を知ってる？言わないと…」

少女の周りに火の玉が現れ、そして物凄い形相で睨みつけてくる。私達はライオンに狙われたウサギのように怯えてしまい、知っていることを全て話してしまった。

「なるほど。本物の装置はこんな色は付いてないってことだね。ふん、そう言う事か。危うく騙される所だったよ」

何かに納得したように言い、私の額を軽く叩いて少女は、メンバーに指示を飛ばしながら出入り口の方へと歩いていく。

「この見張りはお前達。あとの全員は今から地下へ向かうよ！」

そう言うと、見張りに男五人を残して全員レストランを出て行った。ふう、やっと圧迫感から開放されたよ。だけど依然、ここには五人の敵がいる。気は抜けない…だけどこの見張りの人数なら何とか誤魔化して、トイレで警察に連絡できるかもしれない。

見たところ間抜けそうな五人が残ってくれて好都合だ。早速実行に移す。

「ね…ねえ…ちよっとトイレに行きたいんだけど…」

「駄目だ」

あっさりと望みは絶たれてしまった。本気でトイレに行きたくなった時はどうしよう。

「しっかし見張りなんて退屈だよな」

見張りの一人がレストランの奥から勝手にジュースを持ってきてサボり始めた。すると他の四人も集まり、全員が職務放棄。怖い上司（リーダーの少女）がいなくなると途端にサボりだすとは…こいつらは下っ端中の下っ端だ。

「まあ仕方ねえだろ。『空間移動装置』を乗っ取るまでの辛抱だ」

「まさか俺達を残して行っちゃったりしないだろうな？」

こんなのを残していかれたら後処理に困る。トイレにでも流すか？

「それはないだろ。もしそうなったとしても、俺達も後から装置を使って追いかければいいだけだろ？」

「まあ、そういうこつたな」

口々に話し始め、こちらから注意がそれている。この隙を狙ってトイレに…

「はいそこ！動くなよ！」

…行けるはずもなかった。

私は話を続ける下っ端五人の様子を伺い、友美ちゃんは俯き黙り込み、彩花はどんより落ち込みモードから復活し、のんきにレストランのメニューを眺めている。そんな時間が十数分程続いた頃、見張り達の話題も尽きたのか、レストランに静寂が広がる。

と、見張り達がこちらを見てココソコと話し始めた。何かいやらしい目で見てるし嫌な予感がする。そして下っ端五人は私達に近付き、

「お前ら暇だろ？ だったらちよつと俺達の相手しろよ」

「は？ 相手って何よ！ 私達は暇じゃないわ！ あつち行つてなさいよ！」

見張りの一人がニヤニヤしながら私の後ろへ回り込み、

「んなこと言わないで、相手してくれよ！」

羽交い絞めにされて、引っ張りあげられた。

「なっ…何すんのよ！」

「那美ちゃん！」

驚きの表情を浮かべる友美ちゃんも、別の見張りに羽交い絞めにされ同じように引っ張りあげられた。頭は弱そうなのに、力だけは強い下っ端。振りほどけない。

「大人しくしろって。傷つけたりしないからよ」

嘘つけ！ 今からいやらしいことしようとしてるだろ！ 心も体も傷つくわ！

見張りが二人私達の前に回り、テーブルの上に胡座をかき、気持ち悪い笑みを浮かべてこちらを見上げ、残りの一人は、他のメンバーが戻ってこないか見張っている。見張る相手を間違ってるぞと言つてやりたい。それより何で彩花には手を出さないの？ 眼中に無いってこと？ それはそれで彩花がかわいそうだ。彩花だって結構可愛いよ？ やっぱり胸？ 胸なのね？ …って今はそんなことを考えてる場合じゃない！ ダメだ私！ パニくってる！

「さて、それじゃ早速…」

テーブルの二人の男の魔の手が、私と友美ちゃんの服に伸びてくる。

「ちよ…やめて！」

「い…いやあ！」

そして、私達の服が…

脱がされることなく、男二人の両腕が服の手前で氷付けにされた。

「うっ…うわあああっ！」

「な…なんだこれ！ なんなんだよお！」

突然の出来事に狼狽するテーブルの二人。そして追い討ちをかけるように強烈な蹴りが私の前にいた男の顔面に炸裂し、友美ちゃんの前にいた男にぶつかり、共々吹っ飛んでいった。

腕を氷付けにし、蹴りを放ったのは言うまでもなく、彩花だった。彩花はテーブルの上に立ち、残りの三人を怒りの表情で睨みつけている。

「てめえ…！調子に乗んなよ！」

やっぱり下っ端は馬鹿だね。羽交い絞めにしていた私達を開放して、彩花へ迫っていく。その隙に私と友美ちゃんは男達から距離をとった。

「彩花！」

「大丈夫、心配ない。あなた達は縛られている人達の縄を解いて」

「わ…わかった！友美ちゃん！」

「え…でも…」

彩花を心配してオロオロする友美ちゃんの手を引いて、レストランの奥へ向かった。私達が居ても逆に足手纏いになるだけだ。多少心配だけど、十本足の烏賊の化け物を倒した彩花なら三人合わせても手足六本の人間に負けはしないだろう。あ、足の数は関係ないか。

でもまあ、予想的中だった。

男達はそれぞれ魔法を使った。だが彩花はその魔法を易々と避け、一人を氷の魔法を腹に撃ち込み気絶させ、もう一人にその気絶した男を投げつけ倒し、最後の一人を必殺のキックで吹き飛ばした。まさに電光石火。

男達は縛り上げて全員トイレに放り込んだ。そのまま流したいところだけど、詰まっても困るのでやむなく断念した。

「彩花なら大丈夫だとは思ったけど…こんな簡単に倒しちゃうなんて…」

「あいつらは魔法の素人。扱いは簡単。それよりも扱いが難しい物がここにはある」

真剣な表情でこちらを見る彩花。そんなに真剣になるってことは、奴らよほど危険な物を隠し持ってたのだろうか？私はゴクリと唾を飲み込み…

「その…扱いにくいものって…一体何…？」

「それは…ナミの胸」

開いた口がふさがらない。それはもう、顎がはずれたのかと思うくらい。

「ナミの胸は私以外に扱うことのできない神聖なもの。奴らの下種な手で触れていい物ではない。そう…ナミの胸は私の物なのだから」

「いや！違うから！」

またもや彩花の突発性意味不明発言が飛び出した。確かにあんな奴らに胸を触られるのは嫌だけど、なんで今ここで真剣な顔をしてそんなことを言う必要があるのか。もしかして場を和ませるためのボケなのだろうか？

「そして、私の胸はナミの物！」

「それも違うし！」

またもボケてきたのでツツコミ返した。あくまでもボケとツツコミで、彩花だって本気で言

ってるわけじゃない。(と思う) だけどそれを横で聞いていた友美ちゃんは顔を真っ赤にして、「那美ちゃんと四季さんの仲はもうそこまで進んでいたのね…わかったわ那美ちゃん…もう、えっちなのはいけないなんて言わない…二人のこと私応援するから！」

友美ちゃんの目は、物凄くまじめで、物凄く温かいものだった。だがもちろん完全な勘違いであるため、私は彩花との怪しい関係を猛烈に否定した。

彩花は少し残念そうな表情をしたが、(本気だったの?) その後でポツリ：

「ナミは私が守る…」

しばらくこの後どうするか考えていると、レストランの奥がザワザワとし始めたので、奥へ行き何かあったのか従業員的女性に尋ねてみた。

「それが、警察に連絡しようとしたんですが、携帯が繋がらないんです。いえ、携帯だけでなく固定も全く…下とも連絡が取れないし一体どうなっているのか…そういうわけですのでお客様もここを動かない方が幾分か安全かと思われます」

ケータイが繋がらない? そう聞いて自分のケータイを取り出し家にかけてみた。ホントに繋がらない。圏外じゃないのに。

だけどこれってチャンスじゃないだろうか。主力と思われるメンバーは、全員リーダーと地下に向かったみたいだし、ケータイが繋がらないってことは犯人達も連絡を取り合えないってことだ。

「ねえ、今なら何とか逃げられるんじゃない? 犯人達は地下にいるみたいだし。もし途中で見張りが居たとしても、彩花ならパパッとやっつけられるでしょ?」

「でも途中であの大勢が戻ってきたらどうするの? いくら四季さんが強いといっても、あの人数相手に勝てるはずないわ…それに頼りっぱなしというのも悪いわ」

「それは問題ない。けれど、違う問題がある」

また得意の脱線か?

「まさかまた、私の胸が問題だとか言うんじゃないでしょうね…?」

「ナミの胸には何の問題もない。私好みの素晴らしい物。もっと自身を持ってほしい」

「あ…そう…?じゃあ自身、持つちゃおうかな…」

そうだよね。私だって捨てたもんじゃないよね! さすが彩花、わかってる!

「…おほん…また話が脱線してるみたいだけど…?」

友美ちゃんにたしなめられて我に返る。そうだった、私としたことが。話を本題に戻そう。

「それで?何が問題なの?」

「今この建物の動力は見ての通り完全に断たれている。それは動力室が犯人に抑えられている

と言うこと。動力が断たれたということは、鍵があっても魔力施錠の出入り口の扉のロックは外せない。扉を壊すことも魔力強化されているので不可能。外に出るためには、動力室のある地下まで行き、建物の動力を復活させる必要がある」「：それって：犯人達がいっぱいいる所へ乗り込んでいかなきゃいけないってこと：？」

「そういうこと」

大問題だ。だが、彩花はさらに続ける。

「さらに問題なのは、携帯が繋がらないということ。それは『マグネット』も犯人の手に落ちてしまったことを証明している。あらゆる装置が『マグネット』に接続されているこの世界では、これは由々しき問題。早く復旧しなければ世界中が混乱する」

聞けばケータイも信号も病院も、何もかもが『マグネット』に接続されてて、今はまだ完全には支配されていないからケータイの不通だけで済んでるけど、その内全てに影響が出てくるらしい。手術中に完全に落ちたらどうなるか、考えただけでもゾッとする。

のんびりとここで犯人達が帰るのを待っているわけにもいかず、かといって犯人達のいる地下に行くのは自殺行為。八方塞がりだ。

私達が俯いて黙り込んでいると、彩花は一人歩き出した。

「ちよつと：どこに行くの！」

「大丈夫。すぐ戻る。ナミ達はここにいて」

そう言い残し、彩花はレストランから出て行った。

彩花が出て行って一時間：未だ戻って来ていない。

照明も消えたまま、ケータイも繋がらない。さすがの彩花も少し手こずっているのか、それとも犯人達の手に落ちてしまったのか。『マグネット』は復旧していないが、今のところ大きな混乱は起きてはいないようだ。それは窓から見える道行く人の様子からもわかる。だが、やはり携帯を気にしている人は少なからず居るようだった。

もうレストラン街は開店している時間だ。本当ならこのレストラン街にも私達以外のお客さんが来てもおかしくはない時間なのだが、もちろん誰一人としてここにやって来る者は居なかった。だけど、開店時間なのに入口が開かなかつたら来た人が怪しむはず。

「誰かこのことに気付いて、警察に連絡してくれないかな：すぐそこに駅前交番があるのに」
私は辺りをウロウロしながら、彩花が出て行った時間を計るため、そして使えるようになってすぐに警察に連絡できるようにするためにケータイとにらめっこをしていた。

「那美ちゃん、落ち着いて。きっと大丈夫だから：落ち着いて：」

「でも：うう：やっぱりジツとなんてしてらんない！私、下に降りてみる！」

走り出そうとした私の腕を、友美ちゃんが掴んで引き止める。

「ダメ！那美ちゃんが行っても足手纏いになるだけよ！それに大人しくしてれば危害は加えられないんだから！ここで待ってるのが一番いいのよ！」

「あいつらが約束を守るとは限らないじゃない！現にさつきも見張りの男に襲われそうになつたし！彩花のことも心配だし、リゼインさんのことだって：それにもしかしたらどこかに外に出られる所があるかも知れないじゃない！」

私は友美ちゃんの手を振りほどき、出入り口の方へ向かう。

「那美ちゃん！私も！」

来ようとする友美ちゃんを手で制し、

「友美ちゃんはここにいて。彩花が戻ってくるかもしれないし。私なら大丈夫！こう見えても逃げ足には自身があるからね！じゃあちよつと行ってくるよ」

さて、勢いよく飛び出したのはいいものの、窓が殆ど無いため、フロアの奥は思った以上に薄暗かった。走るとちよつと危ない。頼りは、別動力と思われるの非常灯の明かりだけだ。

私達がいた以外の店も何軒もあるのだが、全て入口が閉ざされている。中を覗いてみるとその店の人と思われる人影が見え隠れしていて、どうやら動力が落とされたために入口が開かなくなり閉じ込められてしまったようだ。

「早く、動力を戻さなくちゃ！」

私は昔の記憶を頼りに階段の方へと向かう。確かフロアの奥にあったはずだ。こうして私が自由に歩いているのはこのフロアに犯人のメンバーは一人もいないから。見張りの一人でもいるかと思つたので、ちよつと拍子抜けしたが、そのお陰で難なく階段の所まで来ることができた。（途中に非常口があったのだが、扉が開かず諦めた。何のための非常口なのか…）

屋上へ行くための階段はシャツターが閉じられ上れないようになっていた。必然的に進む道は下へと向かう階段だけとなる。静かで薄暗いと夜の学校並みに怖い。私はジツと階段の下を見つめ、数秒後自分の頬を両手でパチンと叩き、

「よし…行くか！」

覚悟を決めて階段を下りだした。静寂の中に足音が響く。もし近くに犯人がいれば気付いてしまうくらいに響く。

「足音ってこんなに響くものなの…？」

これじゃダメだということで、踊り場付近で階段に腰掛け靴を脱ぐ。それにしても物音一つ聞こえてこない。もしかすると七階にも見張り居るのではないか？私は手すりから身を乗り出して、階下の様子を伺った。そこで目に飛び込んできたのは一人の男の姿。でもそいつは海岸に打ち上げられたクジラのように動かない。なぜなら階段の下でうつ伏せの状態で気絶しているからだ。脱いだ靴を両手に持ち、階段を下りゆっくりとその男に近づく。

「冷た…！」何か踏んだ！

足元を見ると氷の粒が散らばっていた。

「彩花に魔法を撃ち込まれたんだね：悪いことするからこんなことに…」

しかしその男を見て、少し違和感を覚えた。先ほどレストランで見た犯人達の服装は皆、普段着のようだった。だが、この倒れている男の服装はどう見ても明らかにレストラン街のどこかの店の制服だ。

「まさか、犯人に間違えられて彩花に魔法を撃ち込まれちゃったの？」

そうだとしたらとんだ災難を受けた人ということになるけど、まだもう一つの可能性が残っている。

「犯人を中に入れるために手引きした仲間ってことも…」

災難な人か、犯人の仲間か：よし、この男の顔を見て判断することにしよう。前者なら起こしてさつきまで居たレストランに非難させ、後者なら顔に落書きをしてこの場を去る。

恐る恐る、倒れている男の顔を覗き込んでみた。

「…なるほど…」

私はポケットから模型に色を塗った時の赤色のマーカーを取り出し、男の顔にこれでもかというくらいに落書きをしてやり、そしてそのまま立ち去———らずに、男の体を転がし仰向けにし、そして馬乗りになり胸ぐらを掴んで、思い切り揺さぶってやった。

「起きろ！この馬鹿！」

私の目覚まし攻撃に男は目を覚ましたが、頭をクラクラさせて、

「う…やべ…目眩が…働きすぎか…もうちょっと寝かせてくれ…」

「アホか！さっさと起きろ！」

二度寝許すまじ。起きろ寝ぼすけ！私は何度も何度も平手打ちする。男の落書きだらけの間抜け顔が見る見る腫れ上がっていく。だがそれですっかり目も覚めたようだ。

「いってーな！なにしやが…」

言いかけてこいつは途中でやめた。男の表情がめんつゆと間違えて、麦茶でそうめんを食べた時のような顔になっている。さて、なぜ私がこんな暴挙に出たかというのと、何のことは無い。この男、私を知っている男だったからである。

「おはよう、五十路君？」

そう、倒れていたのはあの馬鹿、五十路竜也だった。

「あんた、こんな所で一体何してんのよ？」

「バイト」

「まさか犯人の仲間じゃないでしょうね？」

「んなわけねーだろ！」

この馬鹿は階段に腰掛け、私はその前に立って問答していた。

「じゃあなんでこんな所に倒れてたわけ？」

「ちびっこい女に魔法をいきなりくらわされたんだよ！あいつ俺のこと犯人じゃないってわかって腹にぶち込みやがって：今度あつたらただじゃおかねえ：」

「え：？勘違いでやられたわけじゃないの：？」

「ああ：あいつが一人で下に行こうとしてたから、一緒に行ってやるうと思つたら、『一人で大丈夫だから寝てて』とか言つて：もっと穏便な方法があつただろうに！」

私としてはよくやったと褒めてあげたいくらいだわ。うん！後で彩花の頭を撫で撫でして帰りにパフェでも奢つてあげよう。

「でもなんで店の外に出られたわけ？私見たけど八階の店の入口全部鍵が掛かつて開かなかつただけど：？」「ああ、動力が落ちる前ちようどフロアの奥にあるトイレに行つてたんだ。そしたら何か怪しい集団が階段の方からやつてきて、慌てて個室に隠れたね」

「弱虫」

「うるさい！勇氣と無謀は違うんだ！あんな人数相手に一人で勝てるか！それでだなその後少しして照明が消えたんだ。奴らの気配も遠ざかつてチャンスだと思つて店に戻つたら、入口が閉まつて開かない。そしたらまた奴らの気配がしたからトイレに隠れたんだ」

「ふくん：やつぱり弱虫」

「悪かつたな！だけどこから先は弱虫じゃないぜ。俺は気付かれないように奴らの後を追つたんだ。そして地下まで行つて、奴らの大体の人数を陰から確認して、また戻つて来たつてわけさ」自慢するようなことか？

「そして、途中で彩花と会つて気絶させられたと：ぷっ！」笑つちゃうね。

「笑うな！それよりもお前こそ何でここに居るんだ？ここに居るつてことは犯人が入つてくる前に来てたつてことだろ？：まさか犯人の仲間か？」

ゴスツと鈍い音が階段に響く。私がこの馬鹿の頭を殴つた音が。私のどこをどう見たら犯人に見えるつて言うのよ、まったく。

「私は『空間移動装置』のことを聞きに来て、社長の許可のもと入れてもらったのよ！」

「『空間移動装置』：？そう言や犯人達もそんなことを言つてたな：つてことはやつぱり犯人の仲間か！」

「人の話をちゃんと聞いてろ！」

またもゴスツと鈍い音が響く。こいつは両手で頭を押さえてうずくまる。我慢しろ！

「それで？犯人達の人数はどれくらいなの？大体だけどわかつてるんでしょ？」

「ああ：四十人弱かな：？奴らの話の内容によると、どうやらどつかの高校のークラスみたい

だな。クラス全員で乗り込んできたらしいぜ」

「全員高校生…？しかもクラス全員で…？なんで『リゼ・那美一号』を…」

その場で考え込む。そして思いついたのが犯人達も『私と同じ世界』からこちらに飛ばされてきたのではないかという仮説だった。だから、〈元の世界〉に戻るために『リゼ・那美一号』が必要なのでは…？いや、でもそれではおかしい。さっきリーダーの少女は確かに魔法の火を掌に作り出していた。下っ端五人衆だってへっばこ魔法を使ってた。同じ世界から来たのなら私のように魔法なんていう非常識な力は使えないはずなのだから。

「それで？お前、どうするつもりだったんだ？」

ちよっと待って、もうちよっと考えたいんだから。そう言いかけて顔をあげると、この馬鹿が私をまじまじと見つめていることに気付いた。それがなんだか恥ずかしくて、顔が熱い。夏の太陽のように熱い。私は持っていた靴をこいつの顔面に投げつけた。

「いってえな！何しやがる！」

「ジロジロ見んな！」

まったく、顔を覗き込むなんて失礼極まりない！ホントにまったく！

私はこいつに背を向けて、自分の顔をペチペチと叩き、深呼吸して心を落ち着かせ、そして何事も無かったかのように振り向き、

「私は今から地下に降りてこの建物の動力を復活させるつもり」

そして、にっこりと笑って、

「あんたも来なさいよ？私の盾として」

さすがにあんまりな言い草かなとは思ったけど、こいつは拒否しなかった。笑顔の中に込めた『来なかったらどうなるかわかってるよね？』というメッセージを読み取ったのかもしれない。そしてこいつは小声で一言。

「親父より怖い…」

失礼な！

薄暗い階段を地下へ向かって下りていく。この階段はレストランへ行く人のための階段のようで、一階から七階までのリゼイン社オフィスへは入れないようにシャッターが下ろされていた。今は五階のシャッターの前。「ちよっとこれ開けて」と馬鹿に開けさせてみるが、もちろん開くはずも無い。そもそも手で開ける物でもない。「ならやらせるなよ」やる方もやる方だと思うけど？

「念のためよ。それにしてもオフィスに行けないのはちよっと不利だよね…逃げ道が階段しかないもん…挟み撃ちされたらアウトだね」

「その心配は無いんじゃないか？多分犯人達は全員地下にいるだろうし、来るとしても下からだけだろ？」

足音が鳴るからと私が指示して脱がせた靴をプラプラとさせながら、馬鹿はのんきに言う。
あんたは何もわかってないのね…ふかーい溜息を見せつけるようについて、

「あのねえ…階段はここだけじゃないでしょ？リゼイン社専用の階段もこの向こうにあるんだから。そこから八階に行つて、この階段から下りてくるってこともあるでしょ？」

「でもその階段、八階では扉が閉まってたぞ？動力が落ちてる限り開かないんじゃないか？」
確かにそうだけど…

「だったらいいんだけど…奴ら『マグネット』も掌握してるみたいなのよ。詳しくはわかんないけどもしこの建物の動力とかセキュリティが『マグネット』に接続されてたら、特定の場所だけ動力を復活させることもできるかも知れないじゃない」

「それは…そうかもなあ…もしかしたらいきなりこのシャツターが開いてドカンとか」

「ちよつと！やめてよ…もう…そうならないうちに早く下に行こう」

シャツターから離れて再び階段を下り始める。馬鹿が先を行き、その後ろを私がびつたりとついて行く。何しろこいつは盾だから。一階また一階と下りるたびに、犯人に近づいていると思うと、緊張感が高まり、心臓の鼓動がどんどん早くなっていく。

「怖いのか？」

「そ…そんなわけ無いでしょ！」

「いやだって、俺の服の裾を掴んでるし」

そんなわけ無いでしょ！と思つたらホントに掴んでた。無意識って怖い。

「こ…これは、あんたが逃げないように掴んでるだけよ！」

声が震えてる。全く説得力がない。それを見てこの馬鹿は階段の途中で立ち止まり、

「だったら手を掴まれた方が逃げにくいな」

とか言つて自分の手を差し出してきた。

私はしばらく差し出された手を眺め、そして…

この馬鹿のお腹を蹴飛ばしてやった。

見事に階段から転げ落ちていく。

「ふざけんな！私は怖くないって言つてんでしょ！」

「くそっ…」馬鹿は起き上がりながら、「何しやがる！せっかく気を利かせてやったのに！」

余計なお世話だつての！私は怖くないって言つたら怖くないんだから！階段を下りきり、馬鹿の前まで行つて、

「そんな気を回さなくてもいいのよ！それとも何？そんなに私の手を握りたいって言うの？」

「あほか！だれが好き好んでお前の手を握るか！」

「何よそれ！それじゃあ私の手が汚いみたいじゃない！私はバイキンか！」

「そこまで言っていないだろ！何でそうなるんだよ！」

「じゃああなたはどんな子の手なら握るって言うのよ？」

「そうだな…俺だったらお前みたいにうるさくなくて、乱暴じゃなくて、新聞紙って言っても怒らない奴かな」 無言でこの馬鹿に本日二回目の蹴りをお腹にお見舞い。

「おおお…お前…ちよつとは手加減しろよ…」

とか何とか言って。ホントは痛くもかゆくも無いくせに。私は魔法の教科書を見て、防御魔法つてもものがあるのを知ってるのよ。それが証拠に、あんなに派手に階段から転げ落ちたというのに完全無傷。どうせそれを使っていたに決まっている。

「階段から落とされた時は使ったけど、今みたいにふいに攻撃されたら使う暇無いつての！お前もしかして防御魔法は効果が持続するとか思っていないか？」

「え？違うの…？」ゲームでは大体数ターン効果が続くけど？、

「効果はもって数秒だけだ！したがってお前の蹴りのダメージはダイレクトに受けた！」

「…ごめん…」

自分でもびっくりするほど素直にこの言葉が出てきた。

こいつも予想外だったのか驚いた顔で、「え？なんだって？」と、もう一度聞きなおしてきた。

「…だから…ごめん…って…」

いつもの私ならこの馬鹿に対して謝罪の言葉なんて口が裂けても言わないのだが、何でか今の私はあの言葉を発してしまったんだから仕方ない。薄暗いところに居るから気が弱ってるのかも知れない。

「え…つとだな…」

そんな私を見てこいつは戸惑っている。私が謝るのがそんなにおかしいか？一発殴ってやるかとも思ったが、まあ今のは私が悪いんだからこいつに何を言われても仕方がない。素直に聞こう。

「なーんてな！嘘だよ！」

「は…い…？」

嘘？何が？

「蹴られる前に防御魔法使ってたつての！いやー！いいものが見れた！あんなしおらしい美南はもう当分見られないかもな！うん！今年はまだもう死んでもいい！」

「ああ、そう。嘘だったんだ。よかったー」（棒読み）

じゃあ、遠慮なく。

本日三発目の、そして本日最強の蹴りを五十路君のお腹にプレゼント。

馬鹿が復活するには数分を要した。よっぽどいいところに蹴りが入ったみたいで本当に痛そうだ。でもじゃあさつき言った嘘って言うのも嘘ってこと？ホントは防御魔法なんて使ってなくて：じゃあ何でそんな嘘を：私のことを気遣って？もしかしてこいつって結構：

幸いにもこの休んでいる間に犯人はここにはやってこなかった。結構な大声を出していたけど私達にも気付いていないようだった。地下での作業に集中しているからか、それともう、この建物から出て行ったからなのか。

「それじゃあ、そろそろ行くか」

「あ！待ちなさい！」

私はこいつの手をがっしりと掴んだ。

「ここで逃げられても困るからね！やっぱり掴んでおくことにするわ」

「逃げねえよ！ってか、さつきあんだけ言ってたのに結局握るのかよ」

「違うわよ！『握る』じゃなく『掴む』よ！」得意満面！

「どっちでも一緒だろうが：」

「違うの！全然違うの！」そう、全く全然！

「そうかい。んじゃ行くぞー」

「はうっ：待って」引っ張るな！

今いる場所は三階と二階の間の踊り場。この下に行けば立体駐車場にも繋がっている二階入口があり、そこから出られればわざわざ地下まで行くこともない。出たその足で駅前交番に駆け込んで事件解決だ。でも、世の中そんなに甘くはなかった。入口のドアはしっかり施錠されて開かなかった。そのまま一階まで下り、そしてドアを開けようとしたが、やっぱり無理だった。

「それより何？この『本日休業』って書いたコピー用紙は！」

「犯人が貼ったんだろ？他の客が入ってこないように」

それはそうだろうけど、こんなのに騙されてすごすご帰るほうもどうかと思う。手書きでもかも字が滅茶苦茶下手糞。怪しさ満点なのに。『魔法世界』の人はよっぽどのんびりしてるのかしらね？私は貼られた紙を剥がし、びりびりに破いて紙吹雪のように投げた。

「さてと…」

ここから階段を下りればついに犯人達の集まる地下一階。頼りはこいつの魔法だけ。そもそもどれほどの魔法を使えるのかわからないこの馬鹿に頼らないといけないってのが情けない。

「言っとくけどやりあうなんて無理だぞ？一対四十なんて絶対勝ち目がない」

「わかってるって：だけど、見張りの一人や二人くらいなら何とかかなるでしょ？って言うか何

とかしてよ？それより、動力室ってどこにあるのかな…あんた場所知ってる？」

「知ってるわけ無いだろ！俺は八階のレストランの、ただのバイトだぞ？この会社の人間でもなければ、警備員でもない」

「だよね…」あんたに聞いた私がバカだった。

「とりあえず途中まで下りてみるか…お前、ここで待ってる。俺が一人で見てくるから」

「え…やだ！置いてかないで！」

こいつの手をぐつと掴む。こんなとこに女の子一人残していくなんて非常識にも程がある！

「大丈夫だって。その踊り場から下の様子を見るだけだから」

「私も行くの！」

「…あのさ美南…」

何よ！変なこと言ったら殴り飛ばすわよ？

「お前って結構可愛いとこあるんだな」

変なこと言いやがった！でも殴り飛ばせなかった。

「は…はあ？あんたこんな時に何言ってるの？」ちよつと赤面してみたり。

「いや、学校で見せる顔と今の顔じゃ全然違うと思ってるな。学校じゃいつも俺のこと睨んだり殴り飛ばしたり罵倒したりしてるけど、ここではそんなことを…してたな、さっき」いやいやと首を振って「何と言うか、お前がこんな怖がったり、素直に謝ったりすることなんて今まで想像も出来なかったからさ」

悪かったわね。でもそれはあんたにだけの対応よ。他の人にならそんな態度はとらないわ。

感謝しなさいよ、特別待遇してあげてるんだから。でも、それっていつからの印象なんだろうか。私が『魔法世界』に来たのは数日前。その前までは『この世界の私』が居たはずで、その『私』も、今のこの〈私〉みたいな感じだったんだろうか。

「ねえ、あんたって入学してからずっとそんな感じで私を見てたの？」

「ああ。でもまあこんな凶暴だったって知ったのはここ数日だけだな。それまではそんなに話もしたこと無かっただろ？いつも工藤とつるんで、こっちは話しかけにくかったってのもあるけどな」

「ふーん」

『この世界の私』の姿が少し垣間見られた気がした。どうやら〈私〉と『私』はそんなに違わないらしい。魔法も使えないし、性格も同じ。違うのはこいつとあんまり話さなかったことくらいか。もしこちらの『私』が〈元の世界〉に行ってたとしても、この〈私〉みたいになんとかやっついていそうだね。

「ところで…凶暴ってどういうこと？」

「うわ…覚えてやがった…」

本日三度目のゴスツという鈍い音が響く。こいつは殴られるのが趣味なのか？

「どうだ？気はまぎれたか？」

そのためだけにあんな話をしたの？じゃあどこまでが本気だったのか。「可愛いところあるんだな」って言ったのは冗談だったのか？それだとちよつと残念…なんて思ったりするもんか。だけでもまあ、お陰で気がまぎれたわ。

「ちよつとだけね」

「そうか、んじやいくか」

そう言うところいつは私が殴った時に離れた手をまた差し出してきた。やっぱり私の手を握りたいんじゃないだろうか？まあしかたない、『掴む』ことにしてやる。

私達は踊り場付近まで下りて行き、手すりの上から下の様子を窺う。

「あれ？」

異変に気付いたのはこいつだ。さつき一人でここまで来た時には開いていたはずの地下のシヤッターが閉じられていると言う。

「…って言うか、どうやって閉めたんだ？」

「そうよね…動力は落ちてるんだから、開閉はできないはず…地下の照明も消えてるし…あんたが最初に下りて来た時、照明はどうだったの？」

「確か…消えてたな。全フロア非常灯以外はついてなかったはずだ。暗いってんで奴ら自前の照明つけてたからな。用意のいいことだ」

「自前の照明を…？そんな物を用意してたってことは、地下フロアだけ動力を通わせたってことではないよね？だったら照明を用意する必要なんて無いんだし」

「そうだな…ってことは…お前の想像は間違ってたってことだ」

『マグネット』を使い特定の場所だけ動力を復活させたってことか。

「どうしよう…上に戻ったほうがいいかな…」

「いや…見張りも居ないみたいだし下りてみよう。どっかに従業員用の通路があるかも知れないし。それにお前の知り合いらしい、あのちっちゃい女がどこかにいるかもしれないしな」

「うん…彩花…無事だといいけど…」

踊り場から地下まで下り、辺りを警戒しながら進んでいく。そういえばここで迷子になったことがあったつけ。地下の食料品売り場に来てて、階段の近くのトイレに行った後間違えて変なドアに入ったおぼえがある。そうだ、もしかしたらそこが…

「ここだ…」

記憶どおりそこにはドアがあり、そしてプレートが取り付けられていた。『関係者以外立ち入り禁止』。あの時はまだ小さかったから、この漢字が読めなかったんだね。

「お？開いてるぞ」

ゆっくりとドアを開き、その奥を覗いてみた。中は長い廊下が続いており、途中で幾つかの

非常口のランプが光っている。

「行ってみるか？」

私は無言で頷き、二人で奥へ向かって進む。

途中非常口の扉を開けようとしてみたが、施錠されていた。『マグネット』を使い何か細工をしているのかも知れない。それにしても何も音がしてこない。今この地下に本当に犯人達がいるのかと思うくらいに。

「ねえ：もう犯人達どっかに行っちゃったのかな？」

「だったらいいけどな：多分まだこの壁の向こうにいるんじゃないか？」

この壁の向こうが元食料品売り場で、犯人達がいるであろう、『リゼ・那美一号』が置かれて居る場所だ。所々壁が新しく作られたような箇所が見られるが、多分必要のなくなった食料品売り場だった時の従業員出入り口を塞いだのだろう。

「お：？」

T字に分かれた廊下の、元売り場とは反対方向の先に、『動力室』と書かれたプレートの付いたドアを見つけた。急いで駆け寄る。

「ここが動力室か：鍵は：開いてるぞ」

「やった！これで動力が戻せる！」

ドアを少し開け、中に誰もいないことを確認してから中へ入った。そこは思いの他狭く、四角い箱のような物が壁に幾つかあるだけだ。箱には小さめのプレートがついていて『制御盤』と書かれてある。

「動力室って言うからもっとすごい部屋かと思ってたんだけど…」

「まあこんなものじゃないか？建物の照明や空調の動力なんて、この位の大きさの『魔力機関』があれば十分賄えるだろうし」

なるほど。この部屋は差し詰め『配電室』と言ったところか。その表現が最も適している。見ると制御盤には階数を書いてあり、その下にスイッチが付いている。今は地下一階から、八階まで全てのスイッチのランプは消えている。

「これを押せばいいみたいね。どうする？全部復活させちゃう？」

「待て待て！それじゃあ犯人に気付かれるだろ！とりあえず八階と、それから二階だ。一階だと気付かれる可能性が高くなってしまいうからな」

「そっか。それに、八階から下りて来るなら二階の方が近いしね」

「よし、それじゃ動力を復活させる前にこれからどうするか言っておくぞ」

「なんであんたが仕切ってるの？：まあいいか：それで？」

「お前は二階の出入り口から速攻で外に出て、駅前交番に駆け込んで事情を説明しろ。その間に俺は八階まで上がって、全員に二階から逃げるよう伝えてくる」

「じゃあ、私が一番最初に逃げるってこと？いやよ！まだ上に友美ちゃんがいるのに！それに

彩花だって…とにかくそんなのはいや！」

「俺達二人揃って捕まったら意味無いだろ！俺を信じろって！お前の友達は俺が連れて来てやるから」

なんだこいつは。どこぞのヒーローみたいに格好をつけて…それとも私のことを気遣ってくれているんだろうか…私はこちらと制御盤の方を向き、こいつに背中を向けて、

「…わかった…」

しかたないので、ここまで来たよしみで信じてやることにする。

「よし。それじゃあ二階と八階の動力を復活させてくれ」

言われた通りに、制御盤の二階と八階のスイッチを押す。…しかし…

「あ…あれ…？おかしいよ…？押してもランプが付かない…」

ゲームで鍛えた連打能力で何度も何度も押してみるが、全く反応が無い。

そして動力室に鈍い音が響いた。音に驚き振り返ってみると、馬鹿が私の方に向かって倒れてきていた。私は押されるようにしりもちをつき、馬鹿は私の足元でうつ伏せの状態で気絶していた。

「はーい、ごくろうさん」

顔をあげるとそこにはあのリーダーの少女の姿があった。少女は鉄パイプで肩を叩きながら私達を見下ろし、不適な笑みを浮かべている。どうやらこいつはあれで殴り倒されたらしい。

「残念だったな。今この建物の動力は、ほぼ『空間移動装置』に回してんだ。だからそれ押しでも無駄。どのフロアの動力も復活させられねえよ」

「そ…そんな…それじゃあ…ここまで来た意味は…」

「ないな。全く無い。完全な無駄骨だ」少女はそう言ってしばらく笑い、「それにしてもこんな所まで来るとは…残してきた見張りはどうした？」

「あ…あいつらなら、私達にえつちなことをしようとしたから、やっつけてトイレに放り込んでやったわよ！ホントはそのまま下水に流れていって欲しかったんだけどね！」

「なに？あいつら…どんだけ手癖が悪いんだ…」

少女は「ちっ」と舌打ちして、部屋の外にいた仲間に私の手を縛るように指示した。私は抵抗せず、後ろ手に縛られる。

「あ…あなた達、私達が下りて来た事に気付いてたの？」

少女は私が連打したのとは別の制御盤を操作しながら、

「いいや。ここに来るまで知らなかった。たまたま偶然ってやつだ。最後の仕上げに完全に動力を集中させるためにここに来たら、お前らがいたんだ。しかし、ここまで来るとはたいしたもんだ。そうだ、褒美にいいものを見せてやるよ」

「い…いいもの…?」

少女はニヤリと笑って、

「そうだ。『空間移動装置』の本気ってやつをな」

私と馬鹿はシャッターが閉まって入れなかった元食料品売り場へ連れてこられた。そこには色んな装置やそれに繋がるパイプが無数に床を這っている。そしてフロアの真ん中に一際存在感のある、だけど全く飾り気なしの『リゼ・那美一号』が鎮座していた。そしてその側には彼女の姿も。

「リゼインさん！」

リゼインさんと、研究者らしき人達も後ろ手に縛られ横一列に並んで座らされていた。私もリゼインさんの右隣に座るように言われ、仕方が無いので素直に従う。馬鹿はまだ気絶していて、乱暴に放られる。動力室からうつ伏せのまま足を引っ張られてここまで連れてこられたため、こいつの服はヨレヨレだ。

「あなたも捕まっちゃったのね…相沢友美さんはどうしたの？」

友美ちゃんはまだ八階のレストランに居ることを伝えると、リゼインさんはほっとしたように息を吐き

、そしてまだ気絶している馬鹿を見つけて、

「そっちの男の子は？」

「ああ…この馬鹿は八階でバイトしてる、私のクラスメイトの馬鹿です。ここまで一緒に来たんだけど最後の最後でやられて…ホント、馬鹿なんです」

そのお陰で私は殴られずに済んで、盾としての役割は果たしたわけだけど。

「その子服がヨレヨレだけど…」そう言うとりゼインさんは顔を真っ赤にし、「あなた達まさか…えっちの途中でつかまったの？」

えっちの途中…?って違いますよ!私の顔もトマトのように真っ赤になる。

「なっ…何言ってるんですか!そんなわけ無いでしょ?この馬鹿とはそんな関係じゃありませんから!何でそういう発想になるんですか!」

「でも馬鹿馬鹿言ってるのも実は照れ隠しなんでしょ？」

「違います!全然違います!もう!今はそんなことを言ってる場合じゃないんじゃないですか?無事に帰れるかどうかもわからないのに…そうだ…縛ってるこのロープを魔法でなんとか出来ないんですか?」

「無理ね。今この辺りの魔力は殆ど『リゼ・那美一号』に持っていかれてる。無理して魔法を使っても動けなくなるわ」

「魔法量が少ない…ってことですか…」

そう言えばお母さんが魔法量が少ないと魔法を使うのが辛くなるって言ってたっけ。

「私達が使える魔力はほぼゼロ。魔法が使えないのは向こうも同じだろうけど、数が数だからね。とても勝ち目ないわ」

ふう…と息を吐き、諦めたように首を振るリゼインさん。こんなところで大人しく捕まっているところを見ると本当に何も策はないようだ。

「あ、そうだ。もう一つあなたに聞きたい事があるんだけど？」

「何ですか？」

「あつちで縛られてる子も、あなたの知り合い？」

リゼインさんの視線の向こう、研究者さんが並んでいるその陰にの見覚えのある小さな黒髪の少女の姿が見えた。彩花だ！やっぱり捕まっちゃったのか。

「その顔だと知り合いみたいね。あの子ここに連れられて来た時からずっと俯いたまま動かないのよ。声

をかけても反応が無いし…」

まさか、犯人達に何かされた？確かに俯き、そして目を閉じている。でも見た感じ乱暴なことをされた様子はなかった。ホッと息を吐く。でもどうしたんだろう。気絶しているわけでもなさそうだし、どちらかといえば目を閉じて何かに集中している、そんな感じだ。

「彩花！ねえ、彩花聞こえてる？」

少し身を乗り出し彩花に呼びかける。私の声に気付いたのかゆっくりと目を開け、少し驚いたように、

「…ナミ…なぜここに…上で待っているように言ったのに。心配ないとも言ったのに」

そう言われても、すぐ戻ると言い残して一時間以上も戻ってこなかったら心配するって。まあ怪我もなさそうだしよかったよ。

心配する私に彩花はまた頬を赤らめたが、私の横で気絶している馬鹿を見つけると、なんだか急に不機嫌オーラを放出し、ムスツとした表情をしながら、

「デート？」

「どこをどう見たらそういう結論が出るのよ！」

誰が好き好んでこんな危ない奴らが居るところでデートするか！

「ほんの冗談。そこで倒れている人物は邪魔なので私が眠らせていたはずなのになぜここにいるの？」

「私が起こして、盾がわりに連れて来たの」

「なるほど。なかなかの人选。盾としても役に立ったようだし」

「まあね。でも捕まっちゃ盾としても使えなけど…それにしても彩花も捕まってたなんて…私達殆ど全滅だよ…」

「捕まってる…？誰が？」

「いや…だから私達が…」

彩花は自分の置かれた状況をまるでわかっていない様子で目をぱちくりさせ、そして後ろ手に縛られている腕をブンブンと振って、冷静に、そして少し楽しそうに、

「ナミ：私、捕まってる」

「うん：だからさっきから言ってるよね？」

リゼインさんは私達のやり取りを見て、

「ふふ。面白い子ね」

確かに面白いけど、めっちゃくちゃ疲れます。

さて、ところでなぜこんなに自由に話せているかというと、犯人達は忙しそうに『リゼ・那美一号』の操作をしているからだ。結構騒がしいので私達の話し声など聞こえてはいないらしい。それにしても八階の下っ端五人衆と違いこの犯人達はリーダー少女の指示のもと、テキパキとよく働く。だけど作業に集中し過ぎてこちらの監視など全くしていない。

そんな隙について彩花が私とリゼインさんの間に割り込んできた。

「それにしても彩花：捕まったことに気付いてなかったなんて：やっぱり寝てたの？」

「：まあ、そんなところ。私の特技はどんな状態でも寝られること。少しでもできればナミの膝枕で眠りたい。耳かき付きで」

「何で私がそんなことを：まあいいわ。ここから無事に帰れたら、一回だけサービスでやってあげる」

「本当？」

彩花の表情がキラキラと輝く。そしてやる気が漲ってきているようだった。

「その顔だと何か作戦があるのね？」期待せずにはいられない。

「ない」

頭から床に突っ込んだ。じゃあ今の思わせぶりの態度はなんだ！

「今は何も行動を取らないほうが得策。見たところこの空間の魔力はあの装置に浪費されている。だから、あの装置が止まるまで待ったほうがいい」

「そっか：あれが止まれば魔法も使えるようになる：でも、あの人数じゃ勝ち目ないってさつきリゼインさんが：」

「大丈夫。何とかなる」自信満々に言う彩花。

「へえ、じゃあ何とかしてみろよ」

そう言って彩花の前に立ったのはリーダーの少女。彼女は余裕の笑みを浮かべ彩花を見下ろし、そして彩花は自信満々の顔で少女を見上げている。

「まあ、あの装置が止まる頃には、あたしら全員ここにいないんだから、どうにも出来ないだろうけどな」

それを聞いてリゼインさんが身を乗り出す。

「全員いなくなるですって？そんなことは不可能よ！あれの定員は一人だけ。しかも一人空間

移動させるだけでも大量の魔力が必要になるわ。全員を移動させようと思えばどれだけ時間がかかるか。それに、まだそれは実験段階の試作品よ。数人移動させただけで壊れてしまう可能性が高いわ！」

「まあ、一人一人送ってたらそうなるかもな。だが、全員まとめてだったらどうだ？」

「全員：まとめてですって：？」

リゼインさんの顔色がみるみる変わっていく。

「そうだ。あたしらが移動した後壊れても何の問題も無い」少女は装置の方を向き、「今その準備をしてるのさ。中々にややこしい術式だからね。ちっと時間掛かってるけどもうすぐ完成だ。」

まああなたが認識阻害の魔法をかけてなけりや、もっと早くに終わってたんだがな」

認識阻害の魔法？そうか、犯人達が『リゼ・那美一号』をなかなか見つけられなかったのはそのせいか。それに模型に色を塗っていたことでその効果に拍車を掛けたのかもしれない。

「やめなさい！それがどれほど危険なことかわかっているの？失敗すればこの辺り一体が吹き飛ばわ！それにもし成功したとしても魔力が枯渇してとんでもないことに！」

リーダーの少女はぐいっとリゼインさんに顔を近づけ、

「：知っててとぼけてんのか、ホントに知らないのかわかんねえけどな：お前にそんなことを言う資格はねえんだよ！」

「なに：？どういうことよ？」

「ふん：それより見な！」

あれは何？『リゼ・那美一号』の周りに魔法陣のような模様が次々と浮かんでくる。大きい魔法陣を中心に小ささまざまな大きさのものが、『リゼ・那美一号』の周囲を埋め尽くして行く。それを見てリゼインさんや研究者さんは絶句している。彩花でさえ眉をピクリとさせたんだから、これはとんでもない事態になっているということが素人の私にでさえもわかる。

「これがあたしらの努力の結果さ！どうだ！見事なもんだろ！」言われてみれば確かに壮観だ。 「あんたらが『マグネット』とか言うもんを開発してくれたお陰で、こんなことが出来んだ。あれがなきやこまで安定させることが出来なかったからな」

「あらそう：じゃあ感謝してもらわなきやね：」

「ああ。後でたつぷりとお礼をしてやるよ。移動した後でな」

装置が唸りをあげる。出力がどんどんと高まっているようだった。魔力が集まったせい衣装の周りに陽炎のようなものも発生している。

装置に魔力が集まっていくと同時に、リゼインさんや研究者さん達はどんどん辛そうになっていく。もしかして、空間の魔力が極端に少なくなると魔法を使わなくても動けなくなってしまうのか？

そんな中一人なぜか平気そうな顔をしている彩花が、

「…これはまずい状態」

「だ…だよね…このままだと私達も空間移動に巻き込まれて…」

「それは問題ない」

「なんでよ！このままだとどこか知らないところに飛ばされるんだよ？」

「とにかく、問題はそれじゃない。このまま魔力が浪費されると恐らく周囲一キロは、ぺんぺん草も生えないような環境になってしまう」

それほど多くの魔力が消費されてしまうと枯渇はしないにしても、魔法を使えるような状況ではなくなってしまうだろう。今日は日曜日ですぐ近くのショッピングモールには大勢の人が箒に乗って買い物にきている。魔法を使えなくなればその人たちは箒で飛ぶことが出来なくなり、そのまま地上に落下し地面に叩きつけられてしまう。そんなことになったら未曾有の大惨事だ。

リーダーの少女が向こうを向いてるのを確認し、

「な…何とか出来ないの…？」

と、彩花に聞き、

「何とかならない？」

と、彩花はリゼインさんに聞き、

「何ともならない…」

と、リゼインさんは答える。

「…だそう」

「『…だそう』じゃない！」私はあなたに聞いたんだ！

「あの術式に対抗する術式を刻めば何とかなる。だけど、ここには書く物も彫る物も無い」
書く物…？ある！

私はリーダーの少女に聞こえないよう小声で囁き、ポケットの中の一発逆転素敵アイテム、赤色マーカーの存在を彩花に教えてやった。

彩花はマーカーを気付かれないように取り出し、床に魔法陣を描き始める。

「…少し時間が掛かる。見つからないように体で隠して」

そう言われて、両脇にいる私とリゼインさんが少し後ろに下がって、彩花の手元を隠す。最初に大きい目の円を一つ描き、その周りに小さな魔法陣を配置していく。後ろ手に縛られているのに、よくもまあそんなにスラスラと描けるもんだね。後ろにも目がついてるんじゃないの？私はそれをちらちら見ながら、

「あれ…？その大きい丸の中には何も描かないの…？」

「この中は仕上げ。その前に増幅の術式を刻んでいる」

リゼインさんは感心しながら、

「なるほど…そうすることによって向こうの術式に干渉していることを悟られずに安全に増幅

出来ると言うことね？」

「そう。だけどこの方法は他の術式と連携出来ないという弱点もある」

「周りに増幅術式があるからリンクが繋げないのね？」

「でも緊急時には効果絶大。術式がこれだけで済むから」

「普段でも結構使えそうだけど、そうすると手抜きだって言われそうね」

ふむふむ、なるほど。ぜんぜんわからん。だけどここはわかっているフリをしておこう。リゼインさんに私の無知がバレるのが嫌だし。領いといけば誤魔化せるだろう。

「あら、あなたも術式に詳しいの？ だったら是非意見を聞かせてほしいわ」

いえ、勘違いです。とも言えないので、

「私は彩花のことを全面的に信頼してますので、口は挟みません」

などと、もつともらしいことを言っただけでも、彩花はそれを真に受けて、

「ナミの信頼にこたえるために頑張る！」

と、やる気を漲らせたので、まあ結果オーライかな？

そんな時『リゼ・那美一号』の方から、ボウン、と音が聞こえた。見ると先程とは違う魔法陣が装置の表面に張り付くように浮かびあがっていた。

「見ろ！ 元々装置に刻まれていた術式が出てきたぞ！ もうすぐ完成する！」

リーダーの少女は興奮気味に叫びこちらに振り向く。

「完全に発動する前に、お前らはここから出してやる。一緒に移動されても面倒なんぞ。だからもう少し辛抱している」

だったら今すぐ開放してほしいところだけど、それじゃダメだ。今彩花がこの状況を逆転する魔法陣を描いている。逆にそれまでに開放にされてしまうと全てが無駄になってしまう。ここはなんとか開放してくれない方向でお願いしたい。

なんてことを考えていたんだけど、少女は「ん？」と眉をひそめた。私とリゼインさんの座り方に違和感を覚えたようだ。こちらに近付き、彩花の後ろを覗き込む。

「ふん、なるほど。そういうことか」

気付かれた。魔法陣は増幅術式とやらを描き終え、やっと本体を描き始めたところだった。

少女は彩花の後ろに回り、顎に手を当てて彩花の描いたそれを見て考え込んでいる。そしてその魔法陣を読み解いたのか、私達の前に戻ってきて感心したように、

「なかなかやるなお前ら。もしそれを描かれていたら、あたしらの計画も終わってたね。だがどうやら天はあたしらに味方しているようだ。残念だったな」

彩花からマーカーを取り上げ、勝利を確信したかのような顔をして少女は仲間達に、

「最終段階に入れ！ 一班はそのまま装置の調整！ 二班は『マグネット』操作！ 三班は八階の馬鹿どもの回収だ！ それから、八階にいるこいつらの仲間も連れてこい」

私達の仲間？ って、友美ちゃん！

「なんで友美ちゃんを？まさか人質に：？」

「待って！人質なら私になるわ！だから他の人達に手を出さないで！」

リゼインさんが立ち上がるうとするが、少女がその肩を足蹴にする。

「お前を連れて行っても意味がねえんだよ！大人しくしてろ！」

そう言う少女は私達から離れて行った。

でも何で友美ちゃんなの？私や彩花ではダメなのだろうか？友美ちゃんであればいけない理由が何かあるのだろうか？疑問を彩花に投げかけてみた。すると、

「……………」珍しく彩花が何か言葉を探しているようだった。「…私は魔法が使えて、ナミは凶暴。その点アイザワトモミは大人しい。そこが選ばれた理由と推測する」

なるほど、一理あるかもしれない。って、誰が凶暴か！頭をグリグリしてやろうと思ったけど、そうだ縛られてた。

「それより彩花！あれ何とかならないの？」

「なんともならない。つくづく悔やまれる。ぺんぺん草が生えなくなる前に採取しておくべきだった。もしかしたらプレミアが付いて…」

「付くか！そこは悔やむところじゃない！って、そんな冗談を言ってる場合じゃないでしょ！」
「冗談ではない。本気でそう思っている」

だったら私が見つけてきてあんたのとんちんかん頭に植え付けてやるわよ！まったく、どうすればいいのよ！彩花はアホなこと言い出すし、隣ではのんきに馬鹿が寝てるし！早く起きろ！私は馬鹿の足を座ったまま蹴ってやった。起こすというよりは、八つ当たりだね。

「ううん…何だよ…痛って…」

私の目覚ましキックで目を覚ました馬鹿。先ほど犯人に殴られた頭を手で押さえながら身を起こし、キョロキョロと辺りを見ている。こいつは気絶していたため手を縛られていない。馬鹿だね、犯人も。これは大逆転のチャンスだ！

「五十路君！私達の縄を…」

解いて、と言おうとした所で、

「ナミ、どいて」

見上げると、彩花が馬鹿の向こうに立っていた。は？いつの間に？驚きながらも急いで体を前方に座りながら移動させる。なぜなら彩花が蹴りの体勢に入っていたからだ。まさかとは思ったけど本当にあの馬鹿は蹴り飛ばされ、描きかけの魔法陣の方へ吹っ飛んだ。

「ぐはっ…なにしゃが…ぶっ！」

馬鹿は文句を言う暇も無く、今度は頭を掴まれて魔法陣に顔を押し付けられる。私が言うのもなんだけど、彩花のこの馬鹿に対する仕打ちはあまりにも酷すぎる。私が彩花を止めないこととすると、押し付けられている馬鹿の顔がぼんやりと光りだした。そんな特異体質を持っているのかと思ったが、よくみて見ると顔に描かれている落書きが光っていた。

そう言えば私が描いたんだっけ。薄暗くてあんまり目立たなかったから忘れてた。
「これは！」

横で彩花の暴挙を咄然とした顔で見えていたリゼインさんだったが、その現象を見て我に返り
今度は驚きの表情を浮かべている。

落書きは、光ながら顔を離れ描きかけの魔法陣の方へ吸い込まれるように移動し、全て移動
したところで彩花は頭を押さえていた手を開放した。っていうか、彩花いつの間にか縄を解いた
の？

「おい…これはどういうことだよ！」

落書きも無くなりすっかり元の顔に戻ったこいつは、顔を両手で触りながら、

「なんで俺の顔からあんなもんが…おい…まさか…」

いやいや、良かったですね落書きが消えて。

「お前だな？お前なんだろう！階段で気絶してる時にやりやがったな！」

「あんたがあんなところで寝てるのが悪いのよ！落書きされなくなったら、覆面でもして寝な
さいよ！この馬鹿！」

「アホか！誰が寝る時に覆面なんか被るか！ってか、あれは寝てたんじゃなくて気絶してたん
だよ！」

「どっちでも同じよ！この寝ぼすけ！」

私達が言い合っていると、いきなり私の影がこの馬鹿に写し出された。こいつは眩しいそうに
私の後ろを見ている。一体何があるっていうの？振り返って見てみると彩花の魔法陣から煌々
と光の柱が立ち上っていた。滅茶苦茶眩しい。

「バカな！なんでその術式が完成してんだ！」

リーダーの少女がこちらに駆け寄り、彩花は私達を守るように少女の前に立ちはだかって、
「彼の顔に描かれていた落書きのお陰。うつ伏せに倒れていたから私も気付くのが遅れた。だ
けど、うつ伏せに倒れていたからこそこちらにも気付かれずに済んだ」

リーダーの少女は明らかに焦りだし、

「急げ！打ち消される前に装置を作動させろ！おい！三班！そこで何してんだ！お前らは早く
八階に行かねえか！」

「そ…それが…シャッターがどうやっても開かないのよ！『マグネット』に接続してもエラー
が返ってくる！」 シャッターの前で立ち往生しているメンバーの女の子が、泣きそうになり
ながら手元の端末を操作している。見てると何だかかわいそうだ。

「どうなってんだ！おい二班！」

「こちらは『マグネット』に異常はない！シャッターが開かない原因は不明！」

と、端末のモニターを見ているメガネ男子。

「くそっ！くそくそっ！ここまで来てこれか！おい！一班！術式を増やせ！こいつらの術式を

相殺するんだ！」「無駄」

彩花は一步前に出て、静かに言う。自信満々オーラを出しながら。

「相殺は不可能。そちらがいくら術式を増やそうとも、こちらの優位は変わらない。これは絶対。そちらの負けは確定している」

「そんなことわかるものか！」

「わかる」

そう言うと、装置を指差した。先ほど浮かんでいた装置の周りの魔法陣が次々と消えていき、そして装置は悲しい音を立てて停止した。『きゅううん』って。

「そんな！」

「魔法の素人でありながらここまで出来たのは賞賛に値する。だけど、相手にする人物を間違えた。それがそちらの唯一の誤算。大人しく投降した方が懸命」

「よくもまあ自分をそこまで持ち上げられるもんだな。：確かに、装置は止まっちゃったかもしれないねえが、こっちにはまだ『マグネット』って言う切り札が残ってたんだ！これを使えば、世の中を混乱させることだって出来る！わかるか？そんなことをされたくないや、あたしらの言う通りにしなきゃいけないんだよ」

「それは、そちらが『マグネット』を支配していたららの話」

「は？はは！お前！人の話聞いてなかったのか？あたしらは『マグネット』を操作して、あの装置を制御していたんだぞ？今『マグネット』はあたしらの手の中にあるんだ！」

「それは、十数分前までのこと。今『マグネット』は私の制御下にある。そちらが支配しているように見えるのは、私がそう見せかけていただけ」

そう言うと彩花は服をめくり上げ、ごそごそしている。まさかここで下着の交換？…と思っただけどそんなわけはなく、服の中から出てきたのはマンガ本くらいの大きさの、タブレット型の端末みたいだった。その端末を見てリゼインさんが驚いている。

「あ：あれは、『マグネット』のマスター端末！そんな：どうやって！」

「その辺りに放置されていたのを拾った。犯人達はこれが重要なものだとは気付いていなかったみたい」

権威を示す印籠のように彩花は得意げにその端末を見せびらかす。なるほど、その端末でシヤッターを制御して開けられなくしているわけか。よく見てみると端末の上に『マスター』と書かれたラベルが貼ってある。どこまで間抜けな犯人達だ。

「なんてことだ！じゃああたしらは途中からあんたに踊らされてたってことか！だが腹に入れてどうやって操作してたって言うんだ」

「私の特技。詳細は秘密」彩花はマスター端末をリゼインさんに手渡し、「『マグネット』を制御下においても、一番の問題はあの術式だった。空間移動は出来ないよう『マグネット』で設定したが、魔力の浪費は術式を消さない限り止められなかったから。もしナミの落書きが無

ければ本当に、ぺんぺん草にプレミアが付くような事態になっていた」

私のお手柄ってこと？どうよ！私もやる時はやるでしょ？得意満面の笑みを浮かべて馬鹿の方を振り向くと、ギロリと睨んできやがった。あんたも喜びなさいよ！犯人達を止めるのに一役買ったんだから。

「ちっ…切り札まで封じられちゃどうしようもねえな…」

リーダーの少女は観念したかのように肩をガククリさせて項垂れた。諦めて投降する気になったのかな？…と思つた次の瞬間。

「全員撤退！」

少女が大声で叫んだ。すると今まで止まった装置をなんとか再稼働させようとしていた一班や『マグネット』を弄っていた二班が作業を放り出し、シャツターの前で泣きそうになっていた三班もその場を離れ、全員がフロアの奥へ向かって走り出した。

「あたしらは諦めたわけじゃない！いつかまたここの装置を使わせてもらおう！」

こちらに向かつて叫んだ後、犯人達全員で魔法を放ってきた。火に氷に雷。様々な魔法が入り乱れ、見る見るうちに回りは煙で一杯になってしまった。

「けほっけほっ…なに…？煙幕代わり？」

煙にむせながら、彩花の方へ近寄る。

「統率が取れてなかなか見事！」感心したように言う彩花。

「感心してる場合？追いかけてなくちゃ！」

「無駄。追いかけれられないよう侵入口でもある逃走路を塞いでいった」

彩花が指差す方を見ると、床にマンホールのようなものがあり、そのポツカリ空いた穴の中から煙がモクモクと上っていた。失敗に終わった時の事もちゃんと計画していたとはあの少女、確かに策士としてもかなり優秀なようだ。

ともかく、どうやら危機は去つたらしい。あれほど騒がしかった元食料品売り場も今は静寂を取り戻している。「それにしてもあなた、凄いわね！術式もそうだし、『マグネット』の操作も！ねえ、ここで働かない？給料は弾むわよ！」

リゼインさんは私の手の縄を解きながら、彩花をスカウトし始めた。

「平日は学校で昼寝。休日は終日寝るので忙しい。働いている暇なんて無い」

彩花、それは怠け者の理論だよ。

「やれやれ…今日は散々な日だ…顔に落書きされるわ、二回も気絶させられるわ…いてて…」

馬鹿が私の横へ頭を抑えフラフラしながらやってきた。

「なにあんた…まだ殴られたとこ痛むの？」そう言つてこいつの後頭部を覗き込み、「うわ…凄く腫れてる！病院に行った方がいいんじゃない？」

「いやでも…これからバイトだし…」

彩花とは違い、勤労意欲満点だね。でも、

「そんなになってもバイトが大事か？いや！金が大事なのか！この守銭奴！」

「言うに事欠いて守銭奴は無いだろ！」

「とりあえず、落ち着いて」

本格的なケンカになりそうなところで、まあまあと彩花が私達の間割り込み引き離す。

「その程度の怪我なら私が治療できる」

そう言うとき彩花はこいつの後頭部に手を伸ばした。ぼんやりと手が光だし、そして見る間に腫れがひいていった。

「おお！痛みが取れた！サンキュー！」

「気絶させたお詫び。それとナミの盾になったお礼」

彩花は傷の治療まで出来るのか。将来医者になれば大活躍しそうだ。

「でもそんなの使えるんだったらこの前烏賊に襲われた時私にも使ってくれたらよかったのに！」

彩花は『あ…』という顔をして、

「コノマホウワ、キノウオボエタ」

「嘘つけ！」

またもバレバレの嘘をつき、本日三度目のグリグリをお見舞いしてやった。

この後、捕まった時に落とした靴を回収し、八階に居る友美ちゃんと合流して、通報でやってきた警察に事情を説明し、下っ端五人衆が連行されていくのを見て、リゼイン社を後にすることになった。

「さて、そんなじゃ俺はバイトに行くとするか」

「あ…ちよっと…」

私は馬鹿を呼び止め、どうしようかちよっと悩んだけど、やっぱり言わずにはいられなかったので、

「一応お礼言っとくわ…あんたが居なかったら多分、地下まで行けなかったと思うから…その…ありがとう」

「いいって別に。と言うかお前に礼を言われるなんて、思っても見なかった」

何満更でもない顔をしているのよ！何か恥ずかしいじゃない！って、お礼を言うのってこんなに恥ずかしかったっけ？私の顔はきつと唐辛子のように真っ赤になってるに違いない。メチャクチャ熱い！汗出てきた。そんな私を見て、

「きゃー！もしかして恋の始まり？」

と、友美ちゃんは両手を頬に当て楽しそうに叫び、

「ナミに虫がついた…」

と、彩花は不満そうな顔でこの馬鹿を睨みつけ、

「そんなんじゃないから！」
と、私とこいつはぴったりのタイミングでツッコんだ。

リゼイン社を出た私達は当初の予定通り、近くのショッピングモールへ行き、一階のフードコートで腹ごしらえをした後、買い物を楽しんだ。

途中で友美ちゃんが彩花の靴下の長さが左右で違うことに気付き、理由を聞こうとしたが、どうせまたわけのわからないことを言い出すので、無理やり話題を変えてやった。

そして帰路。彩花の家はこの近所だということで、入口で別れることにした。その去り際に一言。

「アイザワトモミ。あなたはそのまま魔法を使わない方がいい」

そう言い残して彩花は去って行った。どういふことかはわからない。でも彩花の忠告は何となく聞いておいた方がいいような気がした。

今日は色々な事があった。駅のホームで列車が来るまでの時間考える。

犯人達はあの装置を使って結局どこへ行ったか？どうして学校のクラス全員が同じ目的で動いていたのか。考えれば考えるほど、疑問が浮かんでくる。リーダーはきつと諦めていない。捕まったあの五人を取り戻しに行くかもしれない。そうなったらまた私はあいつらと合間見えることになるのだろうか：

「…ま…いいか」

考えても疑問は解決しないので、無駄なことをするのはやめた。逃げた犯人達はいつかまた行動を起こす。ならば、次こそ捕まえてその時に聞き出せばいい。そんなことを思いながら、ちょうど到着した列車に乗り込んだ。

ショッピングモールで買った服と、一冊の本を持って。